
地球上の異世界

rouge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球上の異世界

【著者名】

Ζ5511D

rouge

【あらすじ】

いつもと変わらない日常を送っていた竜と祐樹。しかし、彼らが持つ特別な力のせいで、地球の歪にできた空間で生活することとなる。クエストをこなしながら、世界破壊を日論むベインの陰謀を阻止しようと立ち向かう。

すべての序章

僕は海が何より嫌いだ……

それは僕が、僕の不思議な力を物語つてているようだから……

僕は神田竜。
かんだりゅう

ごく普通のありきたりな人生を歩んでいる。
ある一点を除いて……

「おーい竜っ！」

朝一で声をかけてきたのはクラスメートの半田祐樹。
はんだゆうき

こいつは口数の少ないオレに唯一話しかけてくるやつだ。
「昨日のテストどうだつたつ！？」

いつも通りうつとうしげテンションで話しかけてくる。

「別に。」

「何それ！朝からそんなんじや一日は始まらないよ……」

はあ……

仕方なくいつもの場所へ向かうとする。

いつもの場所というのは僕たちが「基地」と呼んでいるところだ。
基地といつてもたいした場所ではない。むしろ基地という表現は間違っている。

ただの教室だ。といつても普通の人では入ることができないような使われていない鍵のかかった教室だ。

「はやくしてねっ」

「はいはい……」

もちろん僕は鍵など持つてはいない。

（職員室から借りてくる勇気があればもっと社交的だらう。）

ではどう開けるのだつて？

僕にはなぜか特別な力がある。物心ついたころには使えるようになつていた。

神に愛されてなのか、神に嫌われてなのかはわからない。僕が思うには嫌われてだと思うが…

開けるという言葉には少々結びつきにくいと思うが、僕の特別な力とは「消す」ということだ。

消すと一概に言つても僕には使い方がいまいちわからない。といふかあまり使いたくない。

なぜかって？消すといつことはその気になれば人でさえ消すことができる。

そんな恐ろしい力を僕が持つているとみんなが知つたらどうなるだろうか…

考えただけでも恐ろしい……少し話がそれてしまつたね。さて、消すというのがなぜ扉を開けるにつながるか。

「はやくしてつて！先生来るよ！」

祐樹がせかすので手短にしよう。

僕と祐樹の存在を一時的に消すのだ。

手を祐樹と僕にかざす。

僕たちはもうほぼ色だけになつた。

一時的に消すことで扉は僕たちを認識せず（もちろん扉には自我はないわけだが）とおりぬけるということだ。

かなり非科学的かつ理解不能だがその辺は勘弁してほしい。僕だつてどうしてこうなるかわからぬ。

どうにかして自分に納得のいく説明をしようと思つたらその考えに至つた。

まあこんな力どうでもいいんだけどね。

基地へ入ると僕たちの体は元に戻つていく。

「ふう…何度もなれないや

「こんなこと普通じゃありえないしな

」そうだ肝心なことを忘れていた。

なぜ祐樹が僕の力を知つているかということだ。

それは簡単。彼も不思議な力の持ち主だからだ。

しかし今は関係ないので伏せておこう。

こここの教室は使われていない上にたくさんのが大量におかれているため僕たちがいることはベランダの窓からはおろか、廊下側のドアにつけられた小窓からさえ見えない。

そのためこの教室は僕たちがほぼ私物化している。

祐樹はゲーム、漫画、勉強道具などを持ち込んでいる。

（ここにいるということは言うまでもないが、授業をサボっているわけだが勉強道具を持ちこむのはなぜだらう…）

それにくらべ僕はノートパソコン一台のみ。

素つ氣無いようだが案外暇つぶしにはなる。

「なんか楽しいことないかなあ。」

祐樹がつぶやく。

「お前は毎日が楽しいだろ。」

「うん！」

即答で返つてくる返事。

祐樹は気楽でいいよ…

PCを力チャ力チャやつていると掲示板があつた。

特に興味をそそられたわけではないのだがなんとなくクリックしてみる。

いくつかのスレッドを見ていると不思議なものが目に入った。

「あなたの潜在能力はなんですか？だつて！」

突然祐樹の声がして驚いて振り返ると後ろから祐樹が覗き込んでいた。

「これって僕たちの力のことじやないのつ？」

ふざけた感じで話しかけてくる祐樹が勝手にクリック。

するといきなり画面が真っ暗になつていろんなウインドウが開いたり閉じたり警告の表示が出つぱなしになつたり…ついにはフリーーズしてしまった。

「あらら……」

「これ何かわかるか祐樹クン？」

妙に優しい口調で問い合わせる。

「えっと…ウイルス…？」

「ざつちりことだよ…」

「この後は言つまでもない。」

「つたく…」

「いつてえ…竜パンチ強すぎ…」

「何か言つたか？」

「何でも「ざいません…」

PCじどうするんだよと思いつつも、もう一度電源を入れてみる。

なんとPCが直つてゐる！んなわけないだろ…と一人で心の中でノリ突つ込みを入れてみる。

やはりダメだ。

もう一度…ダメだ。

あきらめよつと思つたとき突然PCがついた。

「え！？」

「僕の力忘れたの？」

少し驚愕する僕に珍しく落ち着いた口調で祐樹が話しかけてくる。
「そうか…

祐樹の力は電気だ。

こいつもオレと同じように危ない力だが、使おうと思えば簡単に制御できる（らしい）。

「どうしてPCが直つたのでしょうか？」

祐樹が自慢げに聞いてくる。悔しいながらも返答する。

「祐樹が電気をPCに送り込んでウイルスだけを指定して除去したんだが。」

「ざつちりことだよ。ざつちりことって言葉悪くないね。今度使ってみるよ。」

「嫌味のように繰り返す祐樹。

元をただせば祐樹、お前のせいだぞ。

心の中で愚痴をこぼすのが（聞こえるはずがないが）聞こえたのか

祐樹が言つ。

「PC壊しかけたのは悪かつたよ。『めん…でもせつめのスレッジ
変だつたよ。』

「さつきのスレッジがなんだつて叫び…」

「なにかおかしい。

「祐樹、なにか静かすぎないか？」

「もう思つ。」

「さつきのスレッジに今みたいになるよつに仕掛けがされたつて
ことか…」

「多分やう。」

なんでここはこつもつねこのこいつこいつ時はこんなにも静かな
んだ？

「とくになんか暗くなつてしまつてないか？」

「いや、もうこここの教室以外は暗黒と呼べる状態になつてゐるよ、
後ろを振り返つたがもう遅い。

この教室も暗黒に染まつた。

「何が起つてゐるんだ？」

「わからない。」

そりやそつだらうな。

「でも竜……なんだかわくわくしないか！？」

つたく……どういう状況かもわからないのにわくわくとはぬかしたや
つだとつづく思つ。

「どうこつ状況かわかつてゐるのか？」

「全然。」

ふざけるなーとこつ思つは声こぼだせずに呆れ返つてしまつた。

すべての序章（後書き）

大切な時間を使い、最後まで「朗読してくださり本当に有難う」ございました。

ギルドと闇ギルド

あれから何分たつただろうか。
依然として暗黒は続いている。

いろいろと調べたり、祐樹と話し合って今がどのよつたな状況下か考
えてみた。

わかっている事

- ・ここはさつきまでいた場所ではない
- ・暗黒とはいってもなぜか目は見える
- ・僕たち以外の人はいないようだ（あまりにも静か過ぎる）
- ・祐樹はこの状況を楽しんでいる

一つ目の項目は周りを見渡せば一目瞭然だ。
壁がなくなり、代わりに永遠といつても良いよつな長い道のりが続
いている。

二つ目の項目はよくわからない。
四つ目の項目は無視してもよいのだがあえて入れてみた。僕の怒り
を受け取ってほしい。

そしてもう一つ…きっと僕の予想が正しければ僕たち以外にも不思
議な力の使い手がいる…

「これからどうする？」

「まずここから動こうよー！」

ピクニックにでもきたのなら僕だってそうしたい。

「方向もわからずに動くのは危険だ。」

言つてはみたものの他に考えが浮かばない。
そのとき背後から物音がした。

「誰だ！？」

「かわいそうに…闇に飲まれてしまったのか

祐樹をかばいながら一步後ずさつする。

「闇とは…ここのことか？」

おやおや聞いてみる。

「竜? 誰と話してるの?」

何を言つてゐんだ?「イツは…

目の前にいるいかにも怪しげな人が見えないのか!?

「ふざけるのもいい加減にしろ!」

「ふざけてなんかないよ!」

え…?

「そう…私は君の頭の中に直接入り込ませてもうりつてこる。そして君とこいつやってはなしをしている。」

何なんだこいつは…。

「私はベイン。闇ギルドの長。君たちの田はどう考へてもここにふさわしい田とはいえない。たまたま私が通つたところに歪が生じ、迷い込んだというところだな。」

「なぜ…僕だけに話しかける?」

「何…? そんなこともわからんのか? どう考へても話が通じそうなのはお前しかいなかろう。」

ああ…ベインの言つことに大賛成だ。

「僕だけってなんのことだよ…」

まだ喚いている祐樹に言つ。

「ゴメン…よくわからない…少しほうつておいて。」

そういうとすねたようにしゃがみ込んでしまつた。

「まあ君たちはまだ世界を何も知つちゃいない。それに私は今はかなり機嫌が良い。いつもなら…いや、また会えたら会おう。」

「うわつ!」

「なんだ!?」

突然まばゆい光に包まれた。

と思つたらもといた場所に戻つていた。

「なんだつたんだ?」

「わからない……」

「それより竜……頭大丈夫??」

一瞬ぶん殴つてやろうと思ったが祐樹にはさつきの「」とは見えてなかつたらしさいので仕方がない。

「ああ。大丈……」

おいおい……やめてくれよ……

心の中で願いつつ祐樹に尋ねる。

「何かおかしくないか?」

「また!?」

もとの基地に戻つたと思ったらまだ。静かすぎる。

「今度は何色だ……?」

窓にかけていつた祐樹に不安MAXで聞く。

「純白だ……」

もうすでに窓を通り越して基地に入つてきている。

数秒後、一点を除いた同じ世界が広がつた。純白という一点を……。

「まったく……なんなんだ。」

「今日はすっっっっごい楽しい日だね……！」

なんて能天気なやつだ。

今、横を風が通つた気がした。

「今、風吹かなかつた?」

「僕もそう思う。」

久しぶりにまともな会話が成立したよつた気がする。（気のせいかな）

「あら。やつぱり術者さんだつたのね。」

またかよ……と思う前に体を身構える。

「そんなに硬くならなくていいわ。私はアリス。ギルドの長よ。」

少し長い髪の女の人が立つてゐる。多分世間一般で言つ美人という人だろう。

「「」」はどう?」

今回は祐樹も見えるらしい。

「ここは私のつくり出した空間よ。アワードって言つて。ここは入つてくるからには君たちは術者でしょう？」

「術者とはなんのことですか？」

「とぼけても無駄よ。そこの笑顔に満ち溢れている子と君のことよ。

特に君は不思議な力を持つてるわね。」

笑顔に満ち溢れている？

隣を見るとまるで天国の極楽浄土を信じてよかつたと言わんばかりの表情をした祐樹がいた。

こんな状況で…とは思つたがまあいい。これからは気にせずここに。

「まったく話が見えてこないんですけど…」

「僕はわかつたよ！ すばり君は良い人だ！」

確かにそうだろうが……絶えろ僕。

「そうね。私は少なくともあなたたちに危害を加える」とはないわ。

こんなところで話すのはなんだからちょっと場所を移しましょ。」

そういつた次の瞬間、僕と祐樹は消えた。

ギルドと闇ギルド（後書き）

連載2話目です。読んでいただき、本当にありがとうございます。
これからもよろしくお願いします。

到着した場所

「よっしゃー！B級クエスト達成したぜー！」

「おー歓声があがつている。

みんなおめでとう、頼もしいなーなどと言つた声をかけている。

「よくやつたな。ブラン。」

「アリス！これからもどんどん頼んでくれよー！」

その後歓喜に飲まれてブランと呼ばれる男は別の部屋へ行つてしまつた。

「さて……話の続きをしましょー。」

さてつて……ここはどこだ！

明らかに日本ではないだろー。

「ここってどこー？パラレルワールド？？」

「何言つてゐの？ここはあなたたちのいた日本よ。」

なんだ日本か…じゃない！

「嘘だ！こんなありきたりな洋画にでも出できそうな場所は日本なはずがない！」

そうだ。こんなギルドを連想させるよつなとこひね…ギルド？
そういうえばアリスもベインもそんなよつなこと言つていたな。

「ホントに日本の空間の歪に作られたギルドよ。」

「ギルド？ギルドってなに！？」

祐樹も少しは正気になつたようだ。

「私がこれから順を追つて説明していくわ。だから少し黙つてね。

」

僕たちは説教をされる生徒の「」とく黙り込んだ。

するとあまりにもいろいろなことがありすぎたこともあつてか体に力が入らなくなつてしまつた。

「まず、あなたたちはきっと空間に歪を生み出すよつなことをした。それが原因となりこの空間に飲み込まれてしまつたの。ここまでい

い？」

空間に歪?あのフレッシュのせいいか。祐樹はすかさず聞く。

「あの…いいですか?」

「いいわよ。」

「空間に飲み込まれるつて聞く…ギルドとか言つのも関係あるんですねか?」

「やつぱり…あなたたちBワールドに入つたわね。」

Bワールド?聞こうと思ったがその前に教えてくれた。

「Bワールドって言つのはベインのつくり出した空間。でも私のつくり出すのはAワールド。AワールドやBワールドに迷い込む人は基本的に術者なんだけど、Bワールドに入つていくのはとても悪い人たちなの…最終的には世界破壊を自論んでいるらしいわ。それを阻止するべく集まつた集団が私たちよ。私たちのよつな術者は普通の生活をするのはむずかしいわ。だから裏の仕事を取り扱つているの。だから仕事を受注してこなして生活しているからこそはギルドと呼ばれているの。」

なんとなくわかつた気がするが…

「術者つて言つのは…僕たちのように不思議な力を使う人たちのことですか?」

「ん~…」

少し考え込むアリス。

「まあ簡単に言えばそうね。でも自分たちだけがその力を持つているという考えはよくないわ。術者というのは自分のなかの潜在能力を引き出した人のことを言つて。だからみんな能力はそれぞれあるのよ。その力が感情や経験を引き金として表面上にできたときに術者となつてしまうのよ…」

なんだか悲しそうにアリスは話した。

なつてしまつ…と言つことはアリスはなりたくなかつたのだろうか…神をうらんでいるのだろうか。

「どんな術者がいるんですか?」

祐樹がいることを思い出し、はつとする。

「基本的な力の火、水、風、雷の四種類の属性を使う人が圧倒的に多いわね。でも雷はとても珍しいわ。あと、この四つに属さないものを無というんだけどこちらは雷よりももつと数は少ないの。あと、光と闇って言う大部分に分かれる能力のコアがあるんだけど、このギルドに入っている人たちはみんな光よ。」

「無？僕は無に入るのか…」

「無の中にはいろんな能力の人がいるのよ。」
後ろからいきなり声をかけられ、びっくりしていすから落ちてしまった。

「ははっ！新人さん？私はクラランよ。」

見ると僕たちと同じくらいのかわいい女の子がいた。（正直タイプだ）

背はちよつと低くて髪は金髪で目は綺麗な蒼だ。

突如、祐樹が豹変した。

「僕は祐樹。ここでドジってるやつは竜。僕の友達さ。」

こんな祐樹は初めてだ…祐樹ってこんなじやないと思つていた。

正直気持ち悪い…

「あら。あなたたち私のこと気に入ってくれたみたいね。ありがと！これからよろしくね。」

え…確かにかわいいとは思つたが口に出してはいないぞ…

「あ…ちよつと…」

行つてしまつた。

「クラランは竜と同じ無の属性の術者なのよ。あの子はその気になれば他人の心を読むことができるの。」

そうだったのか…

「じゃあさーアリスさん！あそこのあの子は…？」

見ると金髪の同じく僕たちと同じくらいの女の子がいた。（タイプではないがきれいだ。）

「アリスでいいわ。あの子はヘレンよ。アリスとタッグを組んでる

の。タッグを組むと特に仲の良い人同士が協力して仕事をこなせるのよ。ただ、あまり人数が多いと目立つし危険だから特別な時以外は2人で組むものなの。」「

へえ。難しいな。

そのとき、後ろからとても絶大な視線を感じた…

きっと僕はあとで思うんだ…あの時振り向かなければよかつたと…

「竜一タッグを組もう…」

「やだ…」

即答する僕。

「あなたたちはタッグを組むといいわよ。雷と無は非常に相性がいいから。現にヘレンも雷の属性の術者よ。」

もつ一度嫌だと言おうと思つた瞬間、遅かつた…

「決まりー！改めてようしなくな！竜一…」

祐樹、なんだかさつきよううれしそうじやないか？

はあ…人生悪いことばかりじゃないと言つが悪いことばかりじゃないことはないんだなあとつづくと思つ。

「はいはい。」

人生前向きに、という言葉もあるんだしまあいいか。

「じゃああなたたちは1134室を使って。シャワー、トイレ、キッチン、ほほなんでもあるから。わからないことがあつたら何でも聞いてね。」

部屋はいくつあるんだとは思つたがさすがにこれだけのことが起つたらもう驚かない…とか思つていたら祐樹はもうすでに走つてしまつた。

しかしながら僕は聞かなければならぬことがある。

「あのー…ついでですか？」

「あら。まだ何か聞き足りないの？」

「はい…僕たちは学校の途中でここにきてしまつたんです。向こうはどうなつたんですか？」

アリスは悲しそうな顔をしていった。

「それとも話したでしょ……術者となつた時点で……正確にはここへ来た時点でもう元の生活には戻ることはできない。向こうの世界は動き続けているわ。でもあなたたちは向こうの世界にはいなかつたことになる。あなたの力のようすに存在を消すのみ……いや、ごめんなさい。あなたの力のようではないわね。」

「え？ それってどういうことですか？」

「力についてはまた今度詳しく述べ、今日はゆっくり休んで。おやすみなさい。」

壁についた窓はもう黒になつていた。

そうだ。祐樹もすでに部屋にいつていることだし今日はゆっくりと寝よう。

到着した場所（後書き）

第三話題です。次回は力について詳しく述べて説明しようと思っています。これからもよろしくお願ひします。

それぞれの夜（前書き）

スイマセン。

前作のあとがきで力の使い方を詳しく説明するといいましたが、どうしても書きたいことがあったので力の使い方は次回にまわします。今回は情景描写に気をつけて書いてみました。伏線も入れてみたので探してみてください。

それぞれの夜

部屋はどこだ？と探していたら祐樹を見つけた。

祐樹も探しているようだ。

「どこに部屋があるんだ？」

「僕もさつきから探してるんだよ。」

祐樹は早く部屋に入りたいようだ。

1133室の隣には部屋がない…と思っていたら急に扉が現れた。

「ここかあ！」

祐樹は何の不安も感じずに部屋へ入った。

少しは用心しろよと思いつながらとりあえず中へ入る。

部屋に入ると祐樹はいつにも増してはしゃいでいる。

部屋の中はさらに2つに部屋が分かれていた。よかったです、とほっと胸をなでおろす。

「アリスの空間の中でも天氣つてあるんだね！」

外は雨が降っているようだつた。

僕は楽しそうな祐樹をことじとく無視し、シャワーを浴びてパジャマに着替るなりすぐベッドに入った。

「もう…戻れないんだよな。」

一人つぶやく。

今考えてみると、他愛のない、ホントに素つ氣無くて味氣ない毎日だつたけど、必死に勉強して、必死に考えて、必死にいろんな行事に参加して…悪くなかったかもしれない。

馬鹿やつて、笑いこけて、先生に反抗する友達見て、何やつてんだと思いつながらも他のやつらと一緒に楽しく笑つて…あんな毎日はもう戻つてこない。

そう考えたら自然と涙が頬を伝つた…

あまりにも突然のことで頭が回らなかつた。

でも落ち着いて考えてみると涙があふれてきた。

しかも学校のみんなはオレと祐樹のことは何にも覚えてないんだつたな。

でも急に消えたつてことになるよ!マジか!

祐樹もきっと同じ心境だつ。明日からは共にやつていくんだ。泣いてなんかいられない!

今日はいろいろあります。ゆっくり寝よ。

「ちえつ。竜つてノリ悪いなあ。」

さつさと寝ちゃう...

僕なんかきっと興奮して寝られなこよ。

竜はわくわくしないのかな?

僕はこれからが楽しみで仕方ない!

学校のみんなと会えないのはつらいけどみんなも僕のことは忘れてるんだし、僕も早く忘れよ!

ここ的生活にも慣れていかないと。

それでもヘレンつて子かわいかつたな。

いつか声をかけてみよ。

時計を見ようと思い、見渡したが、見当たらぬ。

これだけの設備だから小さいことには日が向かないのかも。

そう思いながらベッドへ向かう。

明日から仕事…あのプランつて男の人クエストとか言つてたな。

仕事=クエストつてことかな?

明日からクエスト頑張るぞ!

そのためにも今日は早く寝よ。

ふう…新人がまた来たわね。

私今まで1134部屋もよく作ったわねえ…

自分の力に少し自身を持つ。

やっぱりたくさんの人たちがここギルドに入つたけど何人入つても、もとの生活に戻れないと言つたときの罪悪感は消えないわね…窓の外は雨が降り続いている。。

だめね…やっぱり私の出す空間は感情に左右されてしまう。まだベインの空間には及ばない…もつと力をつけなくちゃ。そしてあの子たちには力の使い方を教えてあげないと。もしかしたらエノやノワールたちを凌ぐ強さとなるかもしれない。そうすればベインの陰謀を止めるに近づくわ。

明日は快晴ね。

外を見ると雨はしだいに弱まりつつあった。

それぞれの夜（後書き）

第四話目です。

やつと四話目です。（笑）

いつも読んでくださつている方、初めて読んでくださつたかた、ホントは他の作品探してたのに間違えてここにきちゃつた！というかた。

読んでいただき、ありがとうございました。

次回こそ力について書くのでよろしくお願いします。

力の使い方（前書き）

遅れてスイマセン。

今回はちょっと凝つてみました。

力の使い方

朝（？）目覚めると外は雨が止んでいたが依然として真っ白だ。なんだかもやもやしたような、くすぐったいような気分を感じる。僕は朝食を食べようと思ったが、腹が減っていない。まあ精神的に厳しいし仕方ないか。

祐樹を起こしに行こうと祐樹の部屋に入つたが、祐樹はいない。あいつは確か低血圧だつたと思ったけど。もしかして僕が寝すぎたかな。

時計を見渡したが…ない。
気にせずに祐樹を探す。
やつぱりいない。

先にどこか行つたのだろうと思つてはじめに連れてこられた本部のようなるところへ行く。

そこで祐樹が食事をしていた。

「早いな祐樹。」

「竜が遅いんだよ！」

「時間わかんないんだからしうがないだろつ。」

「あー…時計ないよね。何でだろ。」

話しているとき机の上を見るとすごい量の食べ物の残骸らしきものがあつた。

「これ…全部一人で食べたの？」

「うん。なんでか分からないけど朝起きて腹が減つてないと思つたけど一応何か食べとこと思つて。そしたらなんかその料理人がたくさん運んでくれるんだよ！しかも全然腹いっぱいにならないんだよねえ。」

腹が減らないのは祐樹もか…というかちょっと待て…どこの国でも、どの時代でも無料で快適な空間を作り出してくれる世はないぞ。

「祐樹…その料理人すつごい笑顔だつただろ？」

「え！？ よく分かつたね！ なんで？」

はあ… 「コイツは世の中を知らなさすぎる。

一応祐樹に世の中について話してやった。

「え！？ “じゃあお金いるの！？ 僕持つてないよ…」

祐樹の声があまりにも大きかった。

すごく大柄な黒人の料理人がすごい形相で出てきて祐樹をつかんだ

かと思うと… … 以下略（笑）

今度絶対に払うと約束して死人のような祐樹が席に戻ったとき、ア

リスが来た。

「おはよ祐樹、竜。」

「おはようござります。あの… いくつか聞きたいことがあるんです

が…」

「分かつてるわよ。朝クランにあなたたちの心の中を探つてもうりつたの。だから目覚めが悪かつたでしょ。」

ああ… もやもやした気分はそれのせいだったのか。

向こうのほうにいるクランがこっちを見て笑顔で手をふつてくれた。手を振りつつもやつぱり普通の女の子じゃないんだと心の片隅に置いておく。

浮気とか絶対できないね。（いいさいさい… どうせ僕にはこれから先ずっと縁のないことだからね…）

「じゃあ手短にあなたたちの聞きたい事を答えてそのあとで力について話すわ。まずここ空間について説明が足りなかつたみたいね。あなたたち朝起きてからおなか減つてないでしょ。ここ空間にいるときはおなかは絶対に空かないのよ。でも満腹にもならない。だからここでの食事は大人で言うタバコやお酒みたいなもの。楽しむためにあるのよ。」

「もつと… もつと早く言つてほしかつた…」

ボソッとつぶやいた祐樹。つくづく氣の毒だ。

「でも楽しむためにはお金が必要よ。だからクエストでお金稼ぐの。クエストつてものは仕事と考えて結構よ。ここは空間のなかだ

けど時間の流れは外と変わらないわ。でもこの空間は私のものだから朝とか昼とか夜とか時間はないわ。ただ見かけ上だけ明るかったり暗かったりはするわよ。クエストを受注したいときはクエストボードってところから受注して、私に渡して手続きをすませばいいけるの。そのクエストボードは外が昼の時は白、夜は黒になつてゐるから昼間しかできないクエストは白のときに行へつてわけ。クエストでお金を稼いだらものを買つたり今まであなたたちが外の世界で使ってたみたいに使えるわ。」

ここで皆さんに質問だ。

祐樹の目の色はどこで変わつたのでしょうか。

もちろん答えは決まつてゐる。

「お金」と言つうござが出たときだ。

そしてアリスが話しあがむころには「竜！早くクエストへ行け！」つていだしあうな輝きに満ちた目でじつちを見ている。

「竜！クエストへ行け！」

ほらね…

「まあいいけど報酬金は割り勘だからな。」

「ダメよ。まだ。力の使い方を覚えてからじやないと。それにクエストって言つてもはじめはタダ同然の金額ではじめるのよ。そしてどんどん強くなつて力をつけて名を轟かせるようになつてよつやくクエストの依頼がくるようになるの。簡単なクエストからロード、B・A・S・Hとランクがついてるわ。何にしてもはじめは無名からはじめないと。」

祐樹の顔が青ざめてもつたのは言つまでも…いや、そうでもない。

「じゃあ早く強くなればいいんだろ！竜！頑張りつ！」

「んだけ前向きなんだよ…

「おう。」

一応相槌を打つておく。もう一つ聞きたいことが…

「あの…こまさらなんだけアリスも他のみんなも日本語お上手で

すね。」

「何言つてゐる。あなたたちのほうが英語上手じゃない。」

「あははは。冗談よ。ここギルドの人で電気を操る人がいるの。その人がここ空間に自分の術をかけたの。その人は本当にすごい人でここ空間にいる人全員の脳内の電気信号の、得に言葉の部分だけをいじつてみな理解できる言葉になるようにしたのよ。あなたにとつてはみんな日本語を話しているように、私にとつてはみんな英語を話しているように感じさせるつてこと。」

なぜか懐かしいことを話しているような口ぶりだった。

横では祐樹がいつそう目をきらきらさせていた。

「その人電気を使うんですか！？じゃあ僕もその人みたいになりたい！その人はどういう人なんですか！？」

「スバルっていうんだけど……それより力について説明するから外行くわよ！」

よし！と思つて立ち上がつたらもう外だつた。相変わらず何もない。

「何だこれ！？」

祐樹が声を裏返して驚く。

「ああ……はじめあなたたちをギルドの中に入れたときも使つたですよ。この空間の中では私は好きなように動けるのよ。」「

すごくうらやましい……

「さて、力についての説明をするとしますか。」

今回ばかりは僕もかなりわくわくしている。

「前も言つたと思うけど力は火、水、風、雷に分かれるわ。ちなみにここ空間でもB空間でも光つて力のコアはすごく役に立つの。暗闇で光を持つ人は目が見えなくなることはない。心の目、心眼つて感じのものが使えるのよ。」

あーだからBワールドに入ったとき目が見えたのか。

「術にも属性が同じようにあるわ。術と自分の属性が一致したほうがより強い術がだせるの。私は無と風の属性を持つてから空間を

操る異の術と風を操る術をたくさん身につけてるわ。でも他の属性の術も少しは使えるの。属性が違う分威力は落ちるけどね。

「無と風か。ん？ 異と風？」

「自分の属性つていくつあるんですか？」

「人によつて代わるけど使いやすい順位はあるわ。」

「じゃあ僕は雷以外に何かありますか！？」

すごい迫力で話しかける。相当興奮しているのだろう。

「ええつと…ちょっと待つてね。」

アリスが消えた。1秒…2秒…3…4…

「ゴメンね！ この水晶ないと分からないうから。」

お早いお帰りで。

「この水晶を手の上にのせて。」

言われたままに手の上に乗せる祐樹。

すると突然祐樹はまばゆい黄色い光に包まれた。

「うわーきれいつ！」

祐樹が感嘆をあげる。

「ホントすごーい…」

僕まで感動されてしまう。

「祐樹：あなたすごい珍しいわね。珍しい雷のなかでこれだけ純粹な雷はめつたにないわ。まず他の属性の術はまったく使えないでしょうね。でも雷の術はきっと普通の術者の2倍から3倍はあると思うわ。」

褒められて嬉しそうな祐樹。少し嫉妬してしまう。

「次はあなたね。竜は少し誤解してるからきっと驚くわよ。」

アリスはそういうとこりしながら手を突き出した。

そういうや昨日も言つてたな。よく意味は分からないうが水晶を手のひらに乗せてみる。

すると祐樹のときと同じように…はならなかつた。

突如、僕の周りに数え切れないほどのサイコロのよつな小さいものが現れ、ものすごいスピードで動きだした。

「何これ！？」

その立方体は順調に速度を上げながら上へ上へとあがつていき、竜巻のようになつた。

僕の視界はそれしか見えない。外がまったく見えない。

それはだんだんスピードを緩め、終いには僕の周りを漂つだけのミクロほどの四角となつた。

ミクロというのはおかしな表現だが、簡単に言つと色しか見えないということだ。

色は…色だけにいろいろ？

「すつ…げー竜！虹のベールか！？」

「わかんない…」

茶化す祐樹をさらつとかわす。

「アリス…これって？」

「あなたは自分の力が何かわかつていなかつたようね。初め、あなたは「消す」という力だと思ってたでしょ？違う？」

「そうですけど…違うんですか？」

戸惑いを隠せない…

「これを見てもまだ分からぬの！？」この無数の漂つてているのは原子よ。あなたの力は消すことじゃないわ。分解し、造り出すことなよ。分かる？」

「でも…僕たちは鍵のかかつていない部屋とかに入れたんですよ！僕たちの存在を消して壁に認識させないようにして中に入ったんです。」

「それは大間違いよ竜。あなたはあなたと祐樹の細胞一つ一つを原子として分解して、部屋の中で再構築しただけよ。そもそもあなたたちの存在を消したところであなたたちが消えるのは人の記憶の中からだけなのよ。たとえ存在が消えても壁にぶつかるわ。当たり前じゃない。」

確かに…

「異の属性は未知なのよ…書物などに記されている術は使えないけ

ど自分でオリジナルの術を使つことができる。すばりじこと思わない！？」

「そうだ…消すことじゃない、造ることができるもの…

わくわくは始めの何倍もに膨らんだ。

「それに…」

アリスが何かつぶやいた気がした。

「じゃあそろそろ力の使い方を覚えましょ。そうね…やっぱり術を覚えるのは体で覚えるのが一番ね。私は術のなかで一番シンクロしない雷の術しか使わないから。私に一発でも攻撃を与えたらそこで終了。三十分で空が青くなるようにするから真っ青になるまでに私に攻撃を与えることができなかつたらあなたたちの負けよ。ちなみに負けても何もないとか思わないでね。男の子が女の子に負けるなんて恥なんだから。」

そのとおりだ。絶対勝つぞ！

「勝つぞ！祐樹！」

「当たり前じゃん！頑張ろうぜー！」

「始めるわよーよーー……スタートー！」

力の使い方（後書き）

最後まで読んでくれて有難うございました。
次回予定ではお待ちかねの戦いが入ると思うので楽しみにしていた
だけたら嬉しいです。

アリスは開始の合図と同時に何かぶつぶつ言ひながら僕たちと反対方向へ走つていった。

「ホントに空間移動の術とか使わないんだなあ…」

「竜！そんなこと言つてる場合じゃないって…ぶつぶつ言つてたのは多分、術を発動するための呪文が何かだよ！逃げよ！」

そのとおりだと思うがホントピンチになると頭の回転が速くなるなあ…羨ましいぞ。

祐樹は後ろに逃げようとする。

「待て！逃げるよりも追いかけたほうがいいんじゃないか！…どうせ捕まるのがオチだろ！」

「確かにそうだ…追いかけるよ！」

アリスに向かつて2人で追いかける。

「なあ！一人一緒だと危くないか？」

「それより空に雲みたいなのが出てきたよ！まずいんじゃない！？」

祐樹はオレの意見を見事にかわした。

しかし祐樹の意見のほうが大切だったようだ。

雲はみるみるうちに上一面を覆いつくした。

「逃げ道はないってか…」

「まずはウォーミングアップよ…」

アリスがそういうった気がした。

次の瞬間、とてつもない量の雷が嵐の如く襲い掛かってきた。

雷が落ちた場所はまるで隕石が落下したあとのように真っ黒になり、空間が修復されてもとに戻る。

「おい！シンクロが一番しにくいつて言つたのは一番弱い業つてことじゃないのか！？」

「アリスはギルドの長だよ！強いに決まってるー早くぱぱぱりこなつて逃げるんだ！」

祐樹がいろんな方向へ走り回る。

僕もすぐさま雷を避けようとすると、さすがに避け続けているわけにはいかない。

かといってここは雷を防ぐようなものは何もない…

待てよ…僕の力は消すことじゃないんだ。創り出すことなんだ！

「祐樹！こっちへ来い！」

「固まつたら集中して狙われるだけだよ…」

「いいから！」

祐樹が僕のもとへ来た。

僕はすぐに地面を原子に分解するよつに手を地面にかざしてその手を周りに振る。

た。

「すげー…ナイス竜…」

「早く中に！」

アリスはまだかなり向こうにいる。

「自分の力を早速使ってみたわね。せいぜい頑張ってよ。珍しい術者さんたち。」

中に入るとほつとして力が抜け、へなへなと座り込んでしまった。

「まだ戦闘中だよ…」

分かつてると…力を使うのは少し疲れる。慣れるまではあまりもやみに使えないな…

ふう…一応立ち上がって壁にもたれかかった。

「ここからどうするの？」

「ん…」

外は依然として雷が降り続いている。

「早くあの雲をどけないと時間すらわからぬいよ。」

祐樹の言つとおりだ。

「あの雲…祐樹の力で退けられないかな？」

「簡単に言つてくれるね…やってみる。」

祐樹は片手に力を込めた。

するとすごい高電圧だと思われる電気がピコピコと手の周りにまとわりつく。

その手を思いつきり雲に向けて押し出した。

すごい速さで青白い電流が雲を切り裂いた。

その威力はとんでもないもので、雲全体を蒸発させてしまった：

「お前…化け物か？」

あ然としていると隣では祐樹が肩で息をしていた。

「これ…疲れるね…」

祐樹も力を使つたらすぐ座り込んだ。

空はまだ水色より少し薄いくらいだ。

「やるじゃない…でも安心してる場合じゃないわよ。」

今度はアリスがこちらへ走つてくる。

電気で作られたと思われる棒のようなものを手にして…

「やばいな…あれでたたかれたら泣き叫んでいる子も黙るだろ?」

「そんなこと言つてる場合じゃない!…まず外に出よ!…」

祐樹は呼吸を落ち着かせて外へ出ていくところだった。

僕も祐樹に続く。

外に出るとアリスはもうすぐそこだった。

「まずい! 祐樹、走れるか! ?」

「当たり前じやん! 戦場では疲れてなんかいられないよ!…」

立派な心持ちだ。

「さつきと同じよつに散らばるだ!…」

祐樹はアリスの右へ、僕は左へいく。

アリスはどちらへ行くだろ? うか。

「行くぞ!」

祐樹はさつきと、手に電気の球みたいなものをたくさん作つてアリスに投げつけた。

僕も床をに手をかざして原子に分解し、そのままアリスめがけて手

を振る。

「こんな直線的な攻撃じゃあたらないわよ。」

アリスが飛んだ。と思うと僕の原子が祐樹に、祐樹の電気が僕に向かってきた！

「うわっ！」

とっさに身をかわしたが避けきれなかつた。

体が少し麻痺する…正座をずっとし続けたような感覚だ。

祐樹のほうは無数の原子をすべて避けたようだ。すごいな…

「竜！」

こちらへ駆け寄つてくる祐樹。

「何やつてるの！？敵は待つてはくれないわよ！？」

そういうと2人が固まつたところに、祐樹が作った電気の球の数倍はあると思われる電気の玉を投げつけてきた。

「祐樹！逃げろ！」

僕は体が麻痺してうごかない…

「そんなのダメだ！僕が守る！」

祐樹はそういうと自分の精一杯の力で出しただらう電気の壁を作る。しかし、勢いは落ちたが防ぎきれなかつた。

「うわああああああ！」

その場で倒れこむ…直撃だ。

「祐樹！何やつてるんだよ！逃げろって言つたのに…」

自分の非力さに腹がたつ…まだ力についてほとんど分かつてないのに、自分が非力だということは身にしみてわかる。

「1人はもう行動不能ね。あなたももう動けない。勝負あつたわね。」

アリスがこちらへ近づいてくる。僕の手足はまったく動かない。

空を見上げるとまだ水色だつた。まだ10分くらいはあつただらうに…負け…か。

そのとき、祐樹が電気の球を飛ばした。

「何…？」

アリスは手に持っていた電気棒のようなもので防いで後退した。

「おっしー！」

「まさか…まさかあなた避雷針のようにしてすべての電気を地面に放電したの！？」

「わかんないけど多分ね。」

祐樹が立ち上がって僕に手を差し伸べる。

「大丈夫かよ？」

「なんかまつたく痛くないし体も痺れてないんだ。」

「つたく…心配させんなよ！」

僕は痺れて動けなかつたが、祐樹が僕の体に触れたとたん、痺れがとれた。

「あなた…電気系の術をすべて無効にすことができるのね…まったく頼もしいこと。」

アリスがこちらへくる。もう一度逃げようと思い、今度は2人一緒に走り出す。

直つたばかりの足が少しもつれる。

「逃げてたら私に攻撃は当てるることはできないわよ…」

「ごもつともです。でも今は逃げるほうが優先だ。」

「あと五分もないわ！回復している時間はないわよ…」

そういうころにはアリスは目と鼻の先にいた。

とっさに僕は床からの原子で巨大な壁を作り出す。が即座にアリスの手のうちの棒で円形に切られた。アリスが向かってくる。アリスはまたぶつぶつ言いながら僕たちに手を向ける。

「僕がたてになるつ！」

祐樹が僕の前に立ちはだかる。

「ダメだ！」

なぜかは分からぬがダメな気がした。

「竜の言つとおりよ！」

「え！？」

遅かった。アリスは僕たちに向けて電気を放つた。

見事に僕たちに直撃すると、倒れこんで体が麻痺した。

「な……んで……」

祐樹は相当ショックだつたようだ。

「残念ね。術の中には体质無効化の魔法や術があるのよ。」

「空を見上げるともうじき真っ青になるだろ」と言つとこりだつた。
「私に攻撃を与えることはできなかつたけど惜しかつたわね。この
話はゆつくり本部でしましょ。戻るわよ。」

そういうとギルドの本部についていた。

非力（後書き）

読んでいただき、有難うございました。
次回はいろんな仲間が出てきます。
これからもよろしくお願いします。

「アリスお帰りー！」

「今度の新人はどうだ！？強いか？」

みんなアリスに声をかける。

「ええ。なかなかよ。」

ここの中間で怪我をして元に戻るようで、傷はきれいさっぱりなくなっていた。

そんなことより僕たちは、姉ちゃんと呼べるくらいしか年の差がないアリスに負けて、とても悔しく、自分の非力をに対する思いやら、恥ずかしい思いやらでうつむいていた。

「それで何分くらい持ったんだ？」

何分くらいって…どういうことだよ。攻撃くらわせるまでじやなかつたのか？

「えーっと…大体24、5分ってところね。1人は純正の雷でも、もう1人は無の属性よ。無の子のほうはホントに珍しい異の術を使うわ。」

「何！？そんなに…しかも雷と無つて…」

どつとロビーが騒がしくなった。

いろんなところからすごいわねとかホントに新人か？などと言つた声が聞こえてくる。

クランやヘレン、知らない色んな人たちまでもが顔を見合せている。

「アリス…どういうことですか？攻撃を当てるまでつて言つてませんでしたか？」

僕はやつとの思いで顔を上げ、アリスに聞いた。

「がははは。何言つてんだ！長のアリスに攻撃があたるわけないじやねえか！ましてや力の使い方も知らない新人がよお！」

後ろから前ブランと呼ばれていた男が現れた。

祐樹が顔を上げた。

「どういうことなんですか！？」

「私はあなたたちに力の使い方を体で教えるために戦いをしたわ。それと同時に、あなたたちがどれだけ術を使うことができるのか、あなたたちはホントにタッグとしてやつていけるのか、あなたたちに適切なクエストのランクは何か、などを見極めるテストでもあったのよ。大体、ギルドの長と戦つて勝てるとでも思った？」
うふふ…と笑つた綺麗なアリスが悪魔に見えた。

「え…」

僕と祐樹は恥ずかしい思いがより大きくなつた。

「まあ今までアリスに攻撃を『える』ことができたのはエノヒノワールだけだからな。」

「そうだつたのか…馬鹿みたいだ僕たち。

「ブランは何分くらい耐えたんですか？」

「オレか？オレなんか2分くらいでアウトだつたぜ。」

「え…いかにも強そうなこの人が2分？

「僕たちつてもしかしてよくやつたほうだつたりする！？」

祐樹が元気を取り戻したようだ。

「そうだな。2分で負けたオレでも3年でBランクの任務こなせるようになつたからな。お前らはもつとすごいんじゃないか？」

僕たちは少しずつ嬉しくなつてきた。

「でも負けたことにはかわりないだろ？。」

遠くのほうで窓にもたれかかっている少年がこっちを見ながら言った。

「エノ！なんてこと言うのよ！あの子達は新人よ！20分以上攻撃を避け続けただけでもすごいのよ！？」

クラングエノという子に向かつて怒鳴る。まるで姉と弟みたいだ。

「僕は3分で勝つた。」

さらつと言い返し、どこかへ行こうとするエノの前に男の人が立ちはだかる。

「俺は1分で勝つたぜ？エノちゃん。あんまり新人の子達にひどいこと言つちゃだめだよ。」

エノの頭をクシュクシュとなる。

多分勝つたといつてゐるからにはノワールつて人だろ？。

エノはノワールを避けてロビーから出て行つた。

「ノワールじやない！？あなたがここにいるのは珍しいわね。」

「ああすぐに発つ。Hランクのクエストの途中だからな。ターゲットが逃げちまつたからオレもいつたん戻つてきたんだ。疲れたからな。」

「ゆつくり休んでね。」

クランがそういうとノワールは自分の部屋へ向かつた。周りを見渡すともうほとんどの人は散らばつていた。

「はあ…やっぱ勝ちたかったな。」

祐樹がつぶやくとアリスが言つた。

「ちょっと！みんなして私に勝つた勝つたつていうと私が弱いみたいじゃない！言つとくけど雷の術しか使ってないんだからねつ！アリスも意地を張るんだなあ…

「でも…」

「いいじゃないか。これから頑張つてクエストこなしていけば強くなれる。」

珍しく僕が祐樹を励ました。

「そうよ！あなたたち早く私たちのタッグ、くじゅピターへに追いつきなさいよ…！」

クランがこちらへきて話しかけてくれた。はじめてあつた時と田の色が違う気がしたがどうでもいい。

「タッグ名なんてあるんですか？」

「つける、つけないは自由だけどね。」

アリスが簡単に言つて続ける。

「さつきの戦いであなたたちを見た結果、どのランクから始めてもうか決めたわ。」

祐樹は興奮を抑えきれずに聞く。

「何ランクなんですか！？」

「Dランクよ。」

一瞬世界が静まり返ったと思った。

「何で？アリス？この子達は強かつたんじゃないの？」

クランク戸惑っている。

「そうね。なかなか戦闘中の頭の回転も早かったし、力をうまく使って助け合って頑張ってたわ。」

「じゃあ何で…」

「実質の力は絶対にBランクはあるわね。でも力の使い方がまだ下手だからすぐに力を消費してしまう。そこに攻撃されたら諸刃の剣じゃない。相打ちじや意味ないの。クエストで死ぬことだってあるわ。犠牲を出したくないの…」

アリスは悲しそうだつた。

「だから簡単なクエストからこなしていく、力がうまく使えるようになつてきたらランクを上げればいいのよ。」

僕たちだつて死にたくない。

「アリスつてば優しすぎるんだから。」

クランクがつぶやいた。

「そうだね！物事は順序良くだし。竜、頑張ろつよー。」

「おう！」

よかつた…祐樹も落ち込んでない。

「じゃあ私クエスト行ってくるからね。頑張ってね。」

クランクが行つてしまい、アリスと僕たちだけになつた。

「ところでDランクって何をするんですか？」

「Dランクは基本的にものを運んだり、採取をしたりするだけよ。簡単そうだな…難しいクエストを期待していたのでしょんぼりする。」

「Dランク～Aランクは悪い人やたまに地上にくる怪物とかを倒すのよ。難しさでランク分けされてるわ。」

僕の知らないところで地球上に怪物なんていたのか…

「Sランクは簡単に言うと国が動くぐらいの騒ぎをどうにかして誤魔化すつてところかしら。失敗は許されないわ。」

ありえないな…

「Hは何つ！？」

祐樹はもうHランクにでもなるつもりか…

「Hは地球を滅ぼす可能性のある生き物を倒すの。」

まったく…世の中の裏の摂理は恐ろしい。

「さつきのノワールって人はそのHランク受けてたんですね…？」
「そうよ。ターゲットは人の形をした怪物よ。そいつを探し出して倒さないと地球が危険だから3年ぐらい前から追つてるのよ。体を自在に変化させれるから見失いややすいの。Hランクのクエストをしていいのは今はエノとノワールしか認めてないわ。」

すごい…あんな小さな子が…

「さつきの人たちはどういう術を使うんですか？」

「風よ。純正の風の属性ね。祐樹と同じように。エノは…よく分からないわ。すべての術が使えるの。しかもすべて相当な威力を持つてるわ。無の属性じゃないから異の術は使えないけどね。ブランは火よ。他にアレンは水の属性を持つていて一番強いわ。雷はクーリスよ。火の属性を持っている中で一番強いのはレミイって子なんだけど…女の子が一番なんて火の属性の男たちは何をしてるのかしら。」

「え！？」

祐樹が驚きの声をあげる。

「雷の属性で一番強いのってスバルじゃないんですか！？」

アリスが悲しそうな顔をする。涙をこらえているのが良く分かる。

「スバルは死んだの…クエストをしている途中で…」

僕たちは声をかけてあげることもできなかつた。

「スバルの二の舞にならないようになんてあなたたちはロランクから初めてもらうのよ。」

アリスはほんとに仲間を大切にしているんだと分かる。

「Sランクのクエストはエノを含めてその各属性の一一番強い人たちしか認めていないわ。Aランクから下は結構いるわよ。」

「へー…早く強くなりたいな。

「よし！いろいろ分かつたところで何もしなかつたら始まらない。

クエストに行こう！」

「うん！僕もそう思つたとこだ！」

「クエストはクエストボードについている紙をとつて私に渡してくれたらいけるからね。」

2人は競争するようクエストボードへ走つていった。

「あの子達つてばせつかちなんだから…」

クエストボードにたどり着いたらまず思つた。

「チーム名何にする？」

「大丈夫！もう決まつてる！」

祐樹は自信に満ちた顔できつぱりといつた。祐樹のこいつの顔は非常に信用できないものだ。

「なんだ？」

「最強ズ！」

「却下。」

祐樹からブーリングが巻き起こる。

「じゃあ竜はなにがいいつて言つんだよつ！」

「僕の属性は無で君の属性は雷だから無雷（ライ）つてのはどうだ？」

「おお！かつこいい！それでいこつ！」

単純なやつ。そしてアホだ。無雷だと雷が無いみたいじゃないか。まあ僕はどちらかと言つと雷を使うのやつの口数が無くなつてほしいと言つ思いを始めたんだけどね。

「じゃあクエスト行きますか。」

「初クエストは思い出に残るものにしようねー。」

仲間（後書き）

最後まで読んでください、有難うございました。
次回は竜と祐樹が初めてクエストに出かけます。
2人の初挑戦です。
是非みてやってください。

初クエスト

初のクエストは思い出の残るもの…か。
そう思いながら白いボードにつけられた紙の中で一番思い出に残り
そのものを探した。

紙には左上にランクのアルファベットがついているから間違えたラ
ンクを選ぶやつはいない…と思っていた。
「竜！竜！これなんてどう！？」

祐樹の見せた紙はこうだった。

ランク A

〈依頼内容〉

今凶悪な怪物が夜の街をさまよっています。
警察のほうにいる特殊警察の中の術者も何人か傷を負つほどの事態
です。
どうにかして怪物の討伐、もしくは、怪物たちのいた世界へ送り返
してください。

契約金	10000F
報酬金	15000F
感謝金	契約金 × 2
(フィール （F=）このギルドの通貨）	
（契約金というのはこちら側が払うもので、他の2つはクエスト達 成時にもらえる金額だ。失敗した場合は契約金は返つてこない。）	

「祐樹、お前視力なんだ？」

「僕は視力Aだよ」

「イツ馬鹿すぎる。」

「ここにAランクと書いてあるのが見えないのか？」

「ホントだ…」

「見えなかつたのか？馬鹿なのか？」

そもそも5000Fなんて持つてないぞ。

改めてクエストを探します。

「ねえねえ！口つて書いてあるやつならいいんだよね！」

「そうだよ。」

「これなんてどうー？」「

にこつとした顔で祐樹が紙を見せた。

ランクD

〈依頼内容〉

最近トイレのマナーが非常に悪い人がたくさんいます。

そんな人のせいどんどんトイレは汚れていきます。

どうにかしてトイレのマナー違反者を減らしていただけないでしょうか？

また、トイレ掃除もお願いします。

契約金 0F

報酬金 800F

感謝金 200F

「お前、思い出に残る初クエストにしたいって言わなかつたか？」

「思い出に残りそうだろ！？」

「ああ…臭いだけは残りそうだ。」

もうあいつの意見は無視するべきと分かつた。
ボードを見ていると良さそうなクエストを発見した。

ラックD

＜依頼内容＞

ある人の家からあるものをとつてきていただきたい。
詳細はこちらへ来たときに話す。

契約金	0 F
報酬金	10000 F
感謝金	2000 F

これなら契約金もいらないし、報酬金もそこそこだ。

「これに決めた！」

「どれどれっ！？」

祐樹は初めは真剣な顔で考え込んでいたが、「謎は多いほうがかっこいいだろ」といつたらすぐに同意した。

「アリス！クエスト決めたよ！どうすればいいの！？」

離れたところにいたアリスに問いかける。

「ボードの隣の机に置けば自動でやってくれるわ。机に出てきた場所につくからね。」

机には 日本 東京 八王子市 と出てきた。

「置いたけど…どうやって空間を出入りするの？」

ああと言つてアリスは立ち上がりつてこつちへきた。

「このブレスレットをはめておいて。行くときは出ると心の中で念じればいいわ。かえつてくるときは入ると念じればいい。でも一度向こうへ行つたら帰つてきていいのは2度までよ。3度帰つてきた

らクエスト失敗となるから気をつけて。」

そういうて僕にブレスレットを渡しながら耳元で「祐樹に渡すとどうなるかわからないから」とつぶやいた。同感だ。

「僕のは！？」

祐樹は、次に餌をもらえるのは自分の番だ、と尻尾を振つて待つ犬のようには聞いた。

しかし、めんどうなことになりそうだったのでアリスがなにか言う前に行くと念じた。

ついたのは昼間の人通りが多い道路だった。祐樹を連れて道の片隅まで引きずつてくる。

「なんで僕がブレスレットもらつ前に来たんだよ！」

「アリスがタッグで行くときは一つでいいから交代でつけるといつて言つてた。」

もちろん嘘だ。

「そりなんだ。」

コイツは馬鹿で助かる。

さて、依頼人を探すか……どうやって探すんだ！？

初クエスト（後書き）

毎度読んでくださっている方、初めて読んだ方、有難いございました。

次回はクエスト先での冒険（？）を書きたいと思います。

危ない初陣

「ひへ着いてからもう一時間以上はたつた。

「竜……どうやって依頼人探すの？？」

「今考へてるとい。」

とは言いつつもまったくいいアイディアが浮かばない。どうしようか…

そう考へていると黒いスーツを着た男がこちらへ歩いてきた。

黒いスーツと言うと悪い人のイメージが（少なくとも僕には）あるが、顔を見ると30代後半くらいの家庭的そうなおじさんだった。

「君たちがギルドから派遣されたものか？」

「はい。」

知らない人にはあまり色んなことをペラペラと喋るものではないので、一言で済ませた。

「こんな小さな子たちを派遣させるとはなんてところだ…」

おじさんはぶつぶつ言っているが気にしないことにした。

「それでおじさん。僕たちは何を？と言つたが依頼人なのになんでここにいなかつたの？」

（祐樹よ。僕の心の中の名前を容易く壊さないでほしい）

「まず車に乗つてくれ。移動している途中で話す。」

僕たちは怪しむことなく乗車した。

ずうずうしいことに祐樹は助手席に乗ろうとする。

おじさんの表情を見る限り嫌な顔はしてなかつたのでよしとしよう。車が発進する。

「私は安部雄一。安部さんでも、おじさんでも、どう呼んでくれても結構だ。」

安部さんか。

「さきほどの質問だが、悪かった。あそこに来るのは分かつていたが、だいぶ離れた場所にいたため、来るのに時間がかかつてしまつ

た。

「安部さんは何で僕たちの場所が分かつたんですか？」

「これからクエストにも必要となつてくる。我ながら良い質問だ。」

「そちらの長から聞いてないのか？君の腕にはめてあるブレスレットだよ。それは発信機が着いているから私には君たちがどこにいても分かるのだよ。」

「そうだったんだ。」

祐樹がうらやましそうな目でこちらを見て、悔しくなんかないぞ！
と言わんばかりに話題をそらした。

「おじさん。依頼内容はなんなんですか？」

信号に引っかかる。

安部さんは話しづらそうに、しかし、しっかりとこちらを見ていつた。

「ある人の家からCDを取つてきてもらいたい……CDにはオレンジ色の文字で△○△○△▽と書いてある。」

車が動き出す。

「クーン？虫か何かかな？」

「おじさん。クーンって何？」

安部さんはいかにも運転に集中しているかのように祐樹の質問には答えない。

また信号に引っかかる。

「君たちに任せせる仕事はCDの回収。それだけだ。それ以上も、それ以下も知る必要はない。」

「つちえ～…」

祐樹はなんでも知りたがりすぎなんだよ。

走っている最中、ずっと僕は外の風景をぼーっと眺めていた。

祐樹はすぐ迷惑なこといろいろなことを聞いたり話したりしていつたが、阿部さんも楽しそうだったからそつとしておいた。

「着いたぞ。」

2・3時間走つたところで停車した。

そこは豪邸と呼ぶにふさわしいところだった。セツセキュリティも抜群なんだ。

「言い忘れていたがそのCDは早く回収しないとまずいことになる。明日までには回収してくれ。回収し終えたらそこの図書館に来てくれ。私も行く。」

すいぶん厳しい条件だ。もう太陽は山の後ろへ隠れていいくところだつた。

「言い忘れていたがそのCDを壊したり、PCで読み込んで使用したりしようなどとは努力思うではない。」

そのときの安部さんは鬼よりも怖かつた。（鬼など会つたことはないが。）

「はい…」

返事をすると車はどこかへ走り去つてしまつた。

「おじさん怖かつたね…」

「ああ人は見かけによらないんだと思ったよ。」
「ああ無駄話なんかしている場合ではない。」

「明日までに安部さんに届けなきゃいけないんだ。急ぐぞ。」

「ちょっと待つてよ。なんだかお腹減っちゃつた。」
確かに減つている。

「空間から出ると腹減るんだなあ。」

「そこのお店入つてみようよ！」

祐樹、お前は学習と言つ言葉を知らないのか。

「お金は？」

「あるよ！」

手には一万円札が握られていた。

なら問題はないか…いや、大有りだ。

「待て待て。まさか依頼人様様の車からパクつてきたなんてことは無いよな。」

「パクるなんて人聞きが悪いなあ。貰つたんだよ。」

「いつ貰つたんだ？置いてあるものを勝手に貰つことをパクるとい

う意味だと理解しているか？」

「どうせまた「えつ？違うの？」と言つてくるに違いない。」

「竜つたら疑り深いんだから。僕がおじさんと話しているときこむ
こつからくれたんだよ。お腹空かないよ。」

「ホントかどうか疑わしいが信じるにしよう。」

「前言撤回するよ。人は見かけによるんだな。」

祐樹と僕は顔を見合させて笑つた。

「アリスっ！」

「こちらはクエスト管理人のリリー。」

「どうしたの？」

「まずいことが起きたわ！Dランク任務として契約したはずのクエ
ストが今になつて急に依頼人から「クエストの難易度が上がったた
め、Bランクとしての契約と改正していただきたい。」との連絡が
入つたわ！」

「じゃあそのDランクの受注用紙をBランクになおせばいいだけじ
やない…」

「そうは言つものの、アリスは何がまずいのか察したよつだ。」

「その受注用紙がなくなつてるので…」

アリスは最後まで聞かずに自分の机に向つ。

「嫌な予感は当たりやすいのよね…」

「そうい的ながら机の中のクエストの受注用紙をあさる。」

「ビンゴ…」

そこには

「契約成立」

契約者 タッグ 無雷

と書かれていた。

危ない初陣（後書き）

読んでくださいり有難うございました。
次回も初陣の続きです。
楽しみにしていてください。

「竜！」このラーメンマジ最高っつー！」

「うん。このチャーハンもおいしいよ。」

僕たちは腹ごしらえのために近くの中華料理店に入った。もちろん明日の食費も考えて食べている。

「なあ祐樹、安部さんことで気になつたことない？」

チャーハンを口に運びながら聞く。

「ん…初対面の人にお金くれるような優しすぎることかな。」

「それも確かにおかしいけどもつとおかしいことがあるじゃないか

…」

祐樹は思い当たらぬようだ。

「場所だよ場所。僕たちがクエストに来る時に机には東京の八王子市に着くと表示された。でもその場所に安部さんが来たのは1時間以上たつてから。おかしくないか？」

「ホントだ。普通はクエストを依頼するときに来てほしい場所を指定するはずなのに、おじさんはそこにいなかつたね。アリスが依頼人の探し方を教えてくれなかつたことからも依頼人の近くに着くつてことだろうし。」

なかなか鋭い…僕はそこまで思いつかなかつた。

「もしかしたら仕事かもしれないけど…」

「仕事をしてたならわざわざ「離れた場所にいた」なんてこと言わないからその可能性は低い。ってことだね。」

素直にうなずく。

「それともう一つ。あきらかにおかしいことがある。」

「ここだね。」

祐樹はやつぱり馬鹿じゃない。天然なだけだな。

「やつ。2時間か3時間もわざわざ車で移動するくらいなら最初からここに僕たちを来させればよかつたんじゃないか？」

もう祐樹はラーメンを食べ終えていた。

僕は喋ることと考ることに夢中でまだ半分くらい残っている。要領のいいやつはいいなあ。

「そうだね。どうしてだろ?...」

考え込む祐樹。僕はそのうちにチャーハンを平らげる。

「まあ考えてても始まらないし、おじさんも僕たちとはそんなに関係を深めるつもりはなさそうだったらしいな。」

「そうだな。僕たちがしなければいけないのはCICOの回収。それだけだからね。」

代金を払い、外に出るともうだいぶ暗くなっていた。

「店の中の時計じゃ8時過ぎだったよ。」

案外抜け目がないな。

「じゃあそろそろいきますか。」

この豪邸は誰が住んでるのか気になつたがそんなことはないでいい。

門の前に立つて思った。

「こんな豪邸には赤外線とかの設備あるに決まってるよな。」

「あるのは入り口だけだよ。」

なぜ分かる!?

「ああ……僕がおじさんと話してるときに赤外線装置は入り口の扉だけで他のカメラとかはダミーだから気にすることはないうつて教えてくれたんだ。」

待てよ。安部さんがなぜそんなことを知ってるんだ……
さらに謎が深まる。しかし僕たちの仕事はCICOを回収することだけだ。

「じゃあこの門は普通に通ればいいな。」

「竜お願いね。」

思つたんだが、わざわざ僕たち2人を分解、再構築するよりもこの門をいじつたほうがエネルギーの節約になる。
門に手をかざす。門が朽ちてきた。

僕は中に入ると門を戻そつか迷つたが逃げ道が無くなると困るのでそのままにしておくことにした。

原子は僕の周りを漂う。

「なあ……その原子邪魔になんない？」

「かなり邪魔だ。」

門から扉までは8mほど。どうするか迷つて木の陰に隠れながら考える。

うーん……どうしようか。

「竜つ。」

人が考え込んでいるときは極力喋りかけないでいただきたい。

「何だよ。」

「別に僕たちは招待されたわけじゃないんだし玄関から入ることもないんじゃない？」

「ゴメン。喋りかけてきてくれてありがとう。そのとおりだよ。僕たちは一回外へてる。」

この豪邸は周りに家が立つていて、家と豪邸との間は5mくらいあって人など通りそうもないで悠々と通ることができる。

豪邸の敷地の堀は2mちょっとの高さだ。

「さて……祐樹。提案したのはいいが、どうやって登るんだ？」

「「ゴメンそこまで考えてない……」

勘弁してほしい……

ん？待てよ。

僕の周りに漂つていてる原子を脚立のよつに組み立てた。

「竜つてばちゃんと解決してんじやん。」

とつさに思いついたんだが結果オーライか。堀の上に登つたらちゃんと脚立は分解した。

登つたところには高い木が立つていた。さつきと同じことを繰り返す。

地上から10mほどの高さまで登つた。

「ここからどうすんの？」

「ノープロブレムだよ。」

自信満々に答えたときだった。

「竜！ 黙つて。」

突然今から忍び込もうとしていた部屋の電気がついた。
こいつ電気を感じ取れるのか？

聞こうと思ったが聞けるような状態ではない。
ここに家の人はカーテンも閉めずにテレビを見ている。
気づかれたら終わりだ。

緊迫した空気が流れれる。

20分くらいたつただろうか。豪邸の主は部屋を出て行った。

「ふう…心臓に悪い…」

「まだ気を抜いちゃだめだよ。」

そうだ…まだ仕事中だつたな。

「戻つてくる前にさつさと中へ入るわ。」

今度は原子を細長い鉄の棒に変えて向こうのベランダにどじかせる。
ギリギリだが、なんとかどいた。

すぐにベランダまで伝つていぐ。

落ちたらどうしようつと言つ不安もあつたが何とかたどり着いた。
そのとき部屋にさつきの人、が戻つてきた。

まずい。ここは窓の隅のガラスじゃないところだからまだ見えない。
しかしあつさまでテレビを見ていた椅子に座れば確実に見つかる。
どうする…どうする…どうする…どうする…どうする…

頭だけが空回りする。豪邸の主は近づいてくる。

もうだめだと思つたとき、急に明かりが消えた。

木の方を見ると祐樹が丶サインを出している。タッグを組んでよかつたよ…

部屋から人が出て行き、祐樹がすばやくこちらのベランダへ移る。

「ありがとう…」自然と言葉が出た。

祐樹は不思議そうな顔をしていたが満更でもないようだった。

棒を回収し、中へ入る。

どうやらここはただのリビングのようでCDらしきものは何もない。

部屋を出て他の部屋を探す。

僕たちと違つて田の見えない一般人はまだブレーカーを元に戻せないようだ。

「おじさんが言つてたんだけどここの人は1人暮らしなんだって。それにしては無駄に広い。

「あとブレーカー落とすだけじゃすぐに元に戻るだろうから電気の流れを切斷しておいたよ。そのせいで少し時間がかったけどね。」

「抜かり無いな。あとはCDを探すだけだ。」

声を殺して話す。

5つの部屋を探したが、CDは見つからない。

「ないな…」

「うーん…」

6つ目の部屋に入ったときCDが目に入った。それはまさしくcccccccと書かれていた。色までは暗くて判断できないが、cccccccと書いてあるんだからこれだろ。

「トラップはないか?」

「電気関係のトラップはないよ。」

恐る恐るCDを手にする。

大丈夫だ。

「あとは外に出るだけだけど門直しとかないとダメだな。」

「そうだね。電気回路は切斷したから赤外線も消えてるはずだよ。だから玄関から堂々と出ても大丈夫。」

僕たちは迷うことなくまで着いた。

玄関をでながら案外簡単な仕事だつたなあと思つた。

扉が閉まるときに音が鳴らないようにゆっくりと閉める。

そのときに扉の隣の表札が目に飛び込んできた。

そこには……安部と書かれていた……

事実（後書き）

読んでいただきて有難うございました。
疑問点がいろいろと洗い出されましたね。
次回は疑問点を解決していきます。

減つて増えた謎

偶然か？

いやいや。そんなはず無い…とは言い切れない。

「竜。どうしたの？」

祐樹は気づいていないようだ。

「いや、なんでもない。早く逃げよう。」

そう。ここはまだ戦場。気を抜いている場合ではない。差し足、抜き足で門の外まで来たらすぐに門を元に戻した。

「ふう…ミッショングリリアってか？」

「うん！…そうだねっ。」

2人で喜びを分かち合ひ。

「今からどうするの？」

「ん…今は1~2時くらいか？」

「何時か分かる？」

「1~1時半だよ。」

僕たちがさつきいた中華料理店を指差して言ひ。

「よく見えるなあ。」

「視力Aですから！」

僕はBだから少し羨ましい。

「まずここから離れよう。」

いろいろ歩いたところでちょうど良いカプセルホテルがあつたのでそこにチェックインする。

「話したいことがあるから1部屋のほうがいい。」

「せまくない…？」

「何とかなる。」

2人ともインすると明日の食事代が危うくなりそうなので無理して1部屋だけにしてもらつた。

畳1畳ほどの広さなのでさすがに窮屈だ。

「竜の嘘つき…せまいよ…」

「仕方ないだろつーそんなことよりこれだ。」

CDを2人のせまい間に置く。

それはやはり予想したとおりオレンジ色の文字で○○○○○と書かれていた。

「電気系のトラップは無いのはホントだな?」

今更ついていたとか言われたら「愁傷様だ。

「うん。発信機も盗聴器もついてない。」

よし。

「じゃあ僕の考えを言つてこくよ。」

「声を落としてね。」

分かっている。今でも十分過ぎるくらい静かだ。

「安部さんは初めは1時間以上もかけて僕たちのところまで来た。そんなことわざわざする必要はない。なぜ僕たちとそれほどどの距離をとつていたか分かる?」

真剣に考え込む祐樹。

「何か理由があった。でも…それが何かは分からぬ…」

「そう。理由があった。安部さんが自分の家へ忍び込んでもうひとつ言つことをばれないようにするという理由が。」

どうやらこまいちピンと来ないようだ。

「僕たちがあの家を出るときに僕は見たんだ。彼の家が安部だつたことを。」

祐樹の表情が一変した。

「なんのためにそんなことを?」

「(+)からはまったくの空想だけだ、(+)のCDは兄弟で作ったものだつたんじゃないかな?でもこれをお兄さんのほうが自分の物にしようと考へた。そんなことは許せない。だから奪われる前に奪おうと考えた。兄弟で作ったならこのCDがあれだけ無防備に置いてあつても不自然じゃない。」

「なんで兄弟だと分かるの?」

正直聞いてほしかった質問だ。

「ほら、安部さんの名前雄一だつただろ？あれは声に出しただけでは分からぬけど安部さんのポケットから雄一つて書かれたハンカチが見えたんだ。一いつていうのは基本的に兄弟の弟のほうにつけられる。だからそう思つたんだ。空想だから分からぬけど…」

「それならたくさんあの家について知つてゐるのも変じやないね。」

「うん。これですべてつじつまが合つはずだ。」

やつとすつきりした…

多分安部さんの家に来るまでに2時間以上もかかるような場所に僕たちを来させたのも時間帯を夜にして、ばれにくくするためだつたんだろう。

でも初めから夜専門の仕事にすればよかつたのに…

「そうだ…なんで契約のとき昼にしたんだ？」

「までよ…」JのCD…相当す」Jのものかも。」

「やつぱりそうだよね。昼間に僕たちを来させておいて夜に忍び込むように時間を調整するような面倒な」とまでしてゐからね…」「祐樹も気づいてゐるようだ。

初めから夜専門にするどCDがす」Jのものと語られる可能性がある。だからこのCDに重大な秘密があることを隠すために昼に来てもらうようにしたのか？

しかもロランクのクエスト…」

「うへん…」JのCDが何であれ僕たちはこれ以上知る必要はないんだよね。」

「そうだな。もう今日は疲れたし寝るか。明日CDを渡してクエスト達成だ。」

少しせまい中で体を縮めながら眠りについた。

減つて増えた謎（後書き）

ありがとうございました。
謎が増えてしまいましたね。
次か、その次には戦いが入ると思いますので楽しみにしていてください。

「いってえーー！」

朝起きると体がとんでもない形で硬直していた。
バキバキ…ゴキ。色んな間接が嫌な音を立てる。

「体硬すぎるんだよ。」

どうやら祐樹は平気なようだ。平気な祐樹が恨めしい…
苦痛がやっと治まつたところでホテルを出た。

「朝食どこにする？」

「もちろん昨日と同じお店でー！」

「2日連続か…まあいいよ。」

祐樹はあの店が気に入つたようだつた。

一通り朝食を済ましたところで図書館へ向かう。

「早かつたね。」

声がしたほうを見ると安部さんが椅子に座つていた。

「おじさんこそ早いね。」

「ああ。調べたいことがあつたからそれもついでに済ましておいつ

と思つてね。」

いや、きっと泊まりで出かけてくるとか何とか言つたから家へ帰り
づらこのだらう。

「ところでおひさまじいだ？」

「ここにあります。」

安部さんの田の色が変わつたのが分かつた。

「では契約成立だ。このカードはクエスト達成の証拠みたいなもん
だ。これをそちらの長に渡せば金をもらえるだらう。」

僕たちにカードを渡した。透明で何も書かれていないカード。

「早くこのを渡してもらおうか。」

素直に応じる。

「じゃあ僕たちほいで…」

あのCDが何であれこれで僕たちは赤の他人だ。

「君たち。ここから先は来ても来なくても自由だが、このCDが何か気にならないか？」

「ああ気になるさ。でも面倒事には巻き込まれたくない。

「気になる！」

祐樹が僕の意見を聞く前に答えてしまった。

「なら教えてあげるよ。まず私の家に行こう。」

普通ならこんな言い方をされたら間違いなく誘拐犯か何かだと思うことだらう。

しかし悪い人ではないと思ったのでついていくことにした。それに面倒事は嫌だけどそれ以上に気になつたしね。

安部さんの車に乗る。

乗つて2分もしないうちに着いたのは再び見る建物だつた。しかし僕たちはそれはもつ予測していたので驚くことは無かつた。

「ほう。驚かないのかね。じゃあ中に入ろうじゃないか。」

「中はお兄さんがいるんじゃないんですか？」

しまつたと思つた。できることならこちらが分かつていることはあまり知られなくなつた。

「これはたまげたね。ここの人私が私の兄だと分かつてているとはなかなか切れ者じゃないか。」

そうは言つたものの彼は全然驚いていなかつた。

そんなことよりも彼は急いでいるようだつた。興奮しているのだろう。

「兄は今仕事に行つていて。大丈夫だ。入りなさい。」

2度目の来訪。今度はしつかりと玄関からだ。

僕たちは安部さんについて2階のPCがある部屋まで來た。

「さてこのCDはなんだと思う？」

「おじさんにとって重要な物…かな。」

彼は苦笑し始めた。

「重要な物…確かにそうだ。だが、そんな言葉で片付けられたくない

はないな。」

話しながら椅子に座り、PCのスイッチを入れてCDを入れる。

「JのCDは私たち兄弟の作った最高傑作だ。これが何かということはこれから分かるぞ。」

なんだか気になつたが彼は話し続けるので聞けない。

「しかしこのCDを何年も何年も何年もかかって作り上げたのにあいつは言つた。この家から出でていけとな。理由を聞いたらふざけたものだつた。お前はもう用済みだ、だよ。もう私は怒りと憎しみの塊となつた。」

壊れたロボットのように、まるで僕たちがここにいるということを忘れているかのように話し続ける。そしてどんどん口調が強くなつていく。

「私は家から追い出され、行くあても無くさまよつたよ。世の中は冷たいもので誰一人として助けてくれなかつた。そしてたどり着いたのが君たちだ。君たちのところに仕事を頼もうと思つた。頼むためには裏のルートを使わないといけない。ホントに大変だつたよ。でもそれほどまでに私の怒りは大きかつた。」

PCの画面を見るとCDを起動させているのか、緑のメーターらしきものが真ん中くらいまでたまつっていた。

「初め仕事の依頼をした時は困つたよ。何日たつてもそちらから人が来ない。だから少し高くつくが、Bランクの任務にしてもらつた。そしたら急に君たちが来た。所詮、人などそんなものだと思つたね。」

「彼が椅子を回転させてこちらを見た。初め会つた時は鬼だと思つたが、今はさらに怖い。」

「兄が、完成まであと2週間足らずと言つていたから非常に焦つた。しかし神は死神は私についたようだ。君たちのおかげで兄がそのCDを使う前に盗み出してくれたからね。CDを使えるのは一度きりだ。おかげで私は変われる！」

PCを見ると緑のメーターが満タンまできていた。

「……すなわち蘭、蘭が孵化するとき」の世でもつとも素晴らしい生命の誕生を見ることができるだろ。しかしお前たちはこの世でもつとも残酷な生命の終末を見届けることとなる。」

彼はそのセリフと共に緑の光に包まれた。

「だ……ダメだ！」

「黙れえ！」

なんだか嫌な悪寒がした。

「私は力がほしいのだよ！人を超越する力が！初めから特別なお前らに何が分かるって言うんだ！？この力で復讐してやるよ。兄や冷たい世の中にな！」

彼は腕を思いつきり僕たちに向けて突き出すと僕たちは外まで吹き飛ばされた。

「くつそ……Dランクは收拾だけって言つてなかつたか？」

愚痴をこぼしながら体を起こす。

「祐樹！大丈夫か！？」

「大丈夫だよ！そっちこそ大丈夫！？」

2人ともたいした怪我はなさそうだ。

あいつの力は風か……

「早くなんとかしないと世界が壊される……」

あれ？祐樹なら「僕たちが止めないと……」とかいうはずだが……

「どうし……」

僕は愕然とした。

世界が止まっている。

テレビも、町も、人も、鳥も、すべてが止まっている。

黒ずんだ紅のような色がこの屋敷以外を覆っている。

その色と、今いるここを境界線のようにして、この屋敷一体以外のすべての場所が止まっている……

「何が起こってるんだ……」

「きつと……おじさんのお兄さんはあのじDは危なすぎぬ……と思つた

んじやないかな…だから使わなかつたんだ…」

祐樹は力の無い口調でそういった。

僕もそうだと思う。それに…いや、まずあいつをどうにかして止めないと…

「ふふふ…ふつはははは！素晴らしい…なんと素晴らしい力だ！世界の進行が止まつた。これからこの世は後退していく。お前たちを生贊として世界を一から創り直そではないか！」

…あいつは世界を一から創るというのか…

「結局はあいつもベインと同じで世界を破壊することが目的だつて言つのかよ！」

「そんなの許せない。絶対にこの世界を守る…」

「守るぞ！2人でな！」

祐樹は一瞬驚いたようだつたがすぐに笑みが戻つてきた。

「そうだね！2人でね！」

「最期のお喋りは済んだか！？済んで無くても死んでもらひついで…」

なんてやつだ。

あいつの手から風の塊のようなものがいくつも飛んでくる。それをかわすうちに境界線まできてしまつっていた。

「ぐ…」

「まず1人！」

そのとき祐樹が電気の球を投げつけた。

「2体1じや勝てないのか！？」

火に油を注いだようだが祐樹に気が向いている間に境界線から離れる。

「クソ共が…どれだけあがいたつて埋めようの無い力の差はかわんねえだろうが！」

…あ…これがホントに安部さんだろうか？昨日までの面影はまったくない…人はホントに変わるものだな…

四方八方に風の玉を投げまくる…その間に僕と祐樹は合流する。

「竜…おじさんはまだ自分の力を分かつていなし…きっとおじさん

には物とか人とかを停止させる力もあるはずだよ。」

「世界が止まつたのはCDのオプションかなんかじゃないのか…」

絶望的になる…

「まだ絶対とは言い切れない。だから停止させるって力を使えるってことを悟られないように気を…」

ダダン！ドカン！

くそ…今度は僕たちを狙つてきた。

「消える消える消える！私は神となり、世界を創りだすのだ！邪魔はさせん！」

なんと見苦しい…神となつたところで永遠に生きることはできないのに…

「竜、あと一つ…向こう側行つても僕たちは停止しないから大丈夫だよ！」

それだけ言つとあいつに向かつて走つていつた。

僕つて守られてばかりだな…

嘆いている場合ではない。攻撃だ！

地面に手をかざす。さつき吹き飛ばされたときに壁や家具なども飛んできたのでたくさんの中物がある。

「うおおおおお…」

ありつたけの数を分解すると、家くらいの大きさとなつた。

「お…重い…」

「な…なんだそれは…」

あいつはさつきまでは打つて変わつておどおどとしている。助けられるだけではダメなんだ、嫌なんだ！

「そおら…」

すべての力を使って原子を無数の弾丸のよつとして飛ばす。

「うわあ…僕も加勢だ！」

祐樹も一緒に電気の球を投げつける。

「つぐ…」

あいつは自分の周りに風のベールをまどつた。

しかしそのボールも少しづつ弱まつていいのが分かる…

「クソ共のくせに…私が…私がこんなことではいけないんだ…復讐^{リベンジ}するのだ…すべてを壊すんだ！」

叫んだとたんに無数の弾丸と電気の球は空中で静止した。

「つな！？」

「まずい……自分の能力に気づく…」

「そつか…そつか…そうだ！私は神となるんだ！」

神様なりきりセットの付録CDは使わないでほしい…

風の球を今までと比べ物にならないくらいの大きさ、いや、まだ大きくしようとも力をため続けている。

正直僕は動けない…さつきの攻撃にすべての力を使ったようだ。

かといって祐樹一人では勝てる方法はない…

「祐樹…この場面2度目だな…まったく…情けないよな…」

「そんなこと無い！大丈夫だ！僕が止めるから！」

口では言つものの、無理なことは分かりきっている。

祐樹はたちあがり、あいつのほうを向く。

「クエストは終わってるんだ…帰ることだつてできるんだぜ…？」

「僕が止めるつて言つてるじゃないか。竜、責任とか感じる必要ないんだよ。僕たちタッグなんだからなー助け合つのは当たり前だよ！そもそもここで帰つたら世界が壊れるじゃないか…」

「情けない…ホントに情けない…

「避けられてはたまらんからな。君には動かないでいてもらうよ。」「何！？」

祐樹の動きが止まつた。あれでは術が出せない。

「くつそおおおお！」

「じゃあな。我が野望に貢献してくれた小さなゴブリンたちよ…」

風の球を投げつけた。

終わったと思った。

ギルドに戻ろうかと思ったが世界が崩壊するなら死んだほうがましだと思えた。

祐樹には悪いことをしたと思った。

祐樹に謝りたいと思った。

いろいろなことを頭の中をよぎる。

初陣は心に残る前にこの世に残らなかつたな…
あと数メートルで当たる…といつとこころで誰かが現れた。
神だと思えた…しかしそれは神ではなく死神だつた…

そう、ベインがいたのだ。

孵化（後書き）

最後まで読んでいただき、有難うございました。
今回はどうでしたでしょうか？
次回ベイン登場です。

ヘイン...
が?

前は少し太ったピヨロのような感じだったんだけど、今はスマートで紳士を思わせるような服装をして、ハ

体の周りには中に手が入りそうな、奥行きのある絵が描かれたトラ

姿形が前とすつかり変わつていたが、あの禍々しい魔力の魄は覚え

二二二

「久しは。舜へは光のものよ。」

僕たちの方を見てそういうと突然風が消えた。

「御子の御心を御心に思ふ事」

「あの程度の風球しか使えぬやつが私を愚弄するのか？」

の段落が窓つて二。

あいつはガタガタ震え始めた。

「然るに、此の魔術を手に入れるのが

これが圧倒的な力の差というもののなんだ。

無論、ベイジは指一つとして動かしていかない。

「私の怒りを買つては死罪に等しいぞ。」

「かじらば江野を喰らぬ事叶はず」の「江野」の「江」が
その言葉が恐いからである物だね...

周りを見渡している。

「私のものを破壊しようとするなら仕方がない。」

そのまゝ、ひやへゆつたりとした足取りで向かつて來た。

「お前は誰だ！？」

祐樹は僕の前から動いなかった。

僕はやつと少し動けるようになつた体を起こした。

「ゆ……祐樹……やめろ……」

言葉が見つからない。

「お……お前は誰なんだ！？僕たちの敵か！？」

「つぬやこ。」

その一言で祐樹は倒れた。

右肩から胸あたりまで引き裂かれたよつた痕がついている。赤い液体が地上を流れる。

「がつ……」

「ゆ……ゆ……つぬやこ。」

反応がない。

「大丈夫だ。お前の仲間のようだつたから殺してはいけない。なんなんだ」「イツは……」

「やうか……分からぬのか。まあ無理はないな。私の本当の姿を見るのは初めてだらうからな。」

「そんなことを言つてはいるんじやない！？」

「ほう……ならどういう意味だ？」

なぜ僕たちを助けた！？

僕はこれ以上睨みつけられないくらい睨みつける。

「そんなものの私の勝手だらう。」

そんな嘘を聞いてはいるんじやない！

「お前は遠まわしに聞くのが好きなようだな。やつぱりと言えばよいのに。」

「じゃあ言つてやるよ！お前は何が目的で助けた！？」

「若者は好奇心旺盛だねえ……それが故に命を落とすこともあるところだ。」

ベインも十分に若い。

お前には僕の心の中が嫌といつまび見えているはずだ！

早く言えよ！

「そう急かすなよ……まあいいか。お前はとてもいい能力を持つて
いる。私が惚れ込むまでにな。その力を失うなんてことはさせない
ことではないか？」

それだけか？

「疑り深いな。目的はもう一つあったのだが今はまだ良い。
ベインの体が朽ちてきた。ここから消えるつもりだろ？」

「待て！」

やつとのことで叫んだのと同時に今ある力を振り絞って小さな塊を
飛ばす。

「もつと強くなれ。」

その塊は当たることなく、通りぬけていった。

差（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。
とんでもないことになってしまいましたね。
次回、初クエスト終了です。

得たもの

世界が…動き出した。

ベインがやつたのかどうかはわからない。

先ほど壊れた屋敷は元に戻っていた。

そして、僕たちはその屋敷の庭に倒れていた。

「ゆ…祐樹つ！」

依然として返事がない…

早く治療しないと…まずい…

〈入る〉

そう心の中で念じた。

体がふわっと軽くなり、着いたのは本部のロビーだった。

「竜！祐樹！」

アリスが真っ先に声をかけてくる。

「アリス、祐樹が…祐樹が！」

「ヘアリー！来て！」

アリスが叫ぶと、女の子がこちらへきた。

「うわっ…ひどい傷…」

そういうつてその子が手をかざすと緑色の光が傷を包んだ。

「ヘアリーはね、傷を治すことができる異の術使える子なの。」

無の属性は少ないつて言つてなかつたか？

まあ今はどうだつていい。

「それより…祐樹は治るんですか！？」

「大丈夫、そんなに焦らないで。今ヘアリーが頑張つてるでしょ。仲間を信じなさい。」

そうか…彼女を信じよう。

祐樹の傷が少しづつ治つていく。

「うう…」

「祐樹！？」

アリスも僕もほっとする。

「よかつたわ…」

そういうとアリスは立ち上がった。

「「ゴメンなさい。あなたたちがクエストに行つたあとで依頼主から連絡がきたの。Bランクに変更してほしいって。クエストの危険性を見抜けなかつた私のミスだわ…ゴメンなさい…」

アリスは責任を感じているようだつた。

「アリス、大丈夫。竜も気にしなくていいよ。僕は大丈夫だから。」

振り返ると、祐樹が起き上がつていた。

「目に見える傷なら全然平氣だよ。見えない傷のほうがずっと苦しくて痛い…だから責任感じないでねつ。」

祐樹は無理して作つた笑顔を見せた。

苦しい…きっとアリスも同じだらう。

アリスのうしろ姿を見ると、泣いているようだつた。

「ともかく、死ななくて何よりだわ。これからはこんなミス絶対に起こさないから…」

それだけ言つて歩いていった。

「祐樹、ホントに大丈夫か？」

「うん。少しの間はクエストいけないかもしれないけど…」

悲しそうだつた…

「大丈夫。クエストに行くことより祐樹の体のほうが大切だ。」

「ありがとう。」

「あなたも人の心配してるけど、休まないとダメよ。」

ヘアリーが言つ。

「そうだね。心配してくれてありがと…」

僕は立ち上がる。

「祐樹、歩けるよつになつたら来いよ。」

「うん。」

自分の部屋に向かう。

部屋に入るとソファーに腰をかける。

弱くて、情けない……仲間が頑張つても何一つできない。

悲しかつた。

もう嫌だ……

何分かぼーっとしていたら、急に部屋をノックされた。

「祐樹？ 早いな。」

ドアを開けると祐樹ではなく、クランだつた。

「入つてもいい？」

「あ……うん。いいよ。」

2人ともソファーに座る。

「初めてのクエスト、達成おめでとう。」「

にっこりとした顔はすごくかわいかつた。

「ありがとう……でも……」

うつむいたまま何も話すことができなくなつた。

「分かつてるわよ。あなたの気持ち。」「

あ……そうだった……恥ずかしいな。

顔を上げると紅いきれいな目と目が合つた。

「そういえばカラー・コンタクトしてるの？」

「してないわよ。私、術を使うと目の色が蒼になるのよ。普通は紅よ。」

クランはまた、にっこりした。

「じゃあなんで僕の気持ち……」

「分かるわよ……そんなの。心を読まなくたつて。」

そりやそうか……僕のせいでの祐樹は……

「私も同じだもの……」

「えつ？」

「私の能力は心を読むことでしょ。もしクエストの中で戦闘が起つても、私はたいした術が使えないから自分を守るだけで精一杯。でもヘレンは私を助けてくれる。助けられるのはいつも私で傷つくのはヘレンばっか……」

クランは泣きそうだつた。

「あなたもそうなんでしょう？」

言葉が出なかつた。

「傷つくるのはヘレンばっかで责任感じてるのに、ヘレンはいつも私に责任感じなくていいって言うのよ？いつもいつも助けられてばっかで、感謝しきれないのに、タッグだから助けるのは当たり前だつて言うのよ？いつも攻撃されそうになると、私の前に立つて敵の攻撃を自分の体で防いでぼろぼろになるのよ？私はそんな背中見てるだけ…あなたもそつなら…苦しいわよね…」

クランは泣いていた。

「僕も…同じ…祐樹は助けてくれるばっかで、僕は何もできない。自分の非力さに腹が立つけど何もできない…弱いくせに意地ばっかり張つて、心中で祐樹馬鹿にしてるのに、いざとなると、あいつのほうがずっと頑張つてる。祐樹が僕に指示を出して、僕は動くだけ。クエストが始まつたときからふざけたことしてるとか思つても、あとになつたら、それが大切になつてくる。僕は何一つとして役に立つてない…」

僕も泣きそうだつた…でも女の子の前で泣いたら男じやない…

ああまた僕つて意地張つてるよ…

「強く、なりましょ…泣かなくていいように、誰も傷つかなくていいように。」

クランは涙を拭いて笑つて見せた。

彼女の笑顔のおかげで笑顔になれる。

「うん。」

「強くなつてくれるのは嬉しいけど勘違いしないでねっ！」

突然声がしたのでびっくりしてドアのほうを見る。

祐樹がいた。

「ゴメンねっ。盗み聞きしちゃつた。」

「どこから？」

「全部！」

無邪気な祐樹。全部聞かれてたなんて恥ずかしい。

下をうつむいている僕に向かって祐樹が話はじめた。

「竜、僕言つたじゃん。タッグだから助けるのは当たり前だつて。それもあるけど、もつと大きなものがあるんだ。」

僕のほうを見てにっこりする。

「竜が弱いから助けるんじゃないよ。僕も竜と一緒にいる。誰かが傷つくのが見たくないから助けるんだ。それに竜は役に立つてないなんてことは絶対ないからね！ いるだけで、そこに居てくれるだけで役に立てることだつてあるんだよ。守りたい、助けたい、協力して勝ちたい、つて気持ちがあるから頑張れるんだ。」

思わず泣きそうになつたが……我慢……

「今までの2回はたまたま僕のほうが運がよかつただけだよ。竜も同じ気持ちなら、次は助けられるかもしれないね。助け合つて頑張ろっ！」

やつと分かつた。どんなに「コイツが馬鹿やつても、ウザくても、何やつても「コイツと一緒に居るか。コイツが居てくれるから僕がいられる。」コイツの優しさに僕は助けられる。

「ありがとう。」

涙はでなかつたが、代わりに感謝の気持ちが言葉に表れた。

「ヘレンも同じ気持ちかなあ……」

クランは嬉しそうだつた。

「ありがとね。励ますつもりが、励まされちゃつた。」

「こつちこそありがと。」

クランは出て行つた。

出て行くときに

「私たちの部屋は0805室だけアリスに頼んで近くの部屋に移動させてもらつから遊びに来てね！」

と言つていた。今度お礼を言いにいかなければ。

今日は疲れたから、クエストの報告とかは明日こじみつ。自分の部屋の前で立ち止まる。

「祐樹、今度は助けられないようになくなるからなー。」

そういうとすぐに自分の部屋のほうへ入った。

祐樹も自分の部屋に入った。

窓の外を見ると雲は無いのに雨が降っていた。

得たもの（後書き）

ご朗読有難うございました。

とうとう初クエストが終了です。

竜と祐樹は大きな何かを得ることができたと思います。

次回は無の属性と異の術がじゅじゅになつてゐるので、そこを踏まえて、竜の修行に付き合つていただきます。

眩しい日差しで目が覚めた。

雨は止んでいたが、外は薄暗い。

僕は昨日はそのまま寝てしまつたので、シャワーを浴びる」とこした。

久しぶりだったこともあって、とても気持ちが良かつた。

「竜、早いね。おはよっ。」

「おはよ。起きて大丈夫か?」

「見た目はもう普通で傷跡も残りそうにないけど、火傷したような痛みがある……」

思わず心配になる。

「でも昨日よりは全然大丈夫だよ!」

僕を気遣つてることはすぐに分かるよつたセリフだ。

「そうか。今はゆっくり休めよ!」

一応心遣いは受け取つておこう。

キッチンへ行き、パンのトーストを食べたら部屋を出る。

「祐樹はちゃんと休めよ!」

祐樹はおとなしく部屋に戻る。

ホントに痛そうだ……看病してやりたい。

でも僕にはやらなければいけないことがある。

その前に本部へ行き、クエストの報告をしなければ行く途中、クランに会つた。

しかし挨拶を交わしだけだつた。

くつそーもつと社交的だつたら……

そんなことを考えていたら本部に着いた。

朝早いというのにみんなにぎやかだ。

ん?待てよ。

僕たちは帰つてきたときを夜として僕は考へてるけど……今は時間は

無いんだった。

僕たちが帰ったころに起きた人からすればもう夕方くらいなんだ。
どうでもいいか。

クエストボードの隣の机へ向かう。

「こんなにちは。用件は？」

机が喋つた。便利な世の中になつたものだ。

「クエスト達成の報告です。」

「キーを挿入してください。」

「キー？」

「キーって言つのはクエスト達成時に依頼主からもうつた透明の力

一ടのことよ。」

振り返ると、知らない人が立つていた。

不思議そうにしているとあわてたように付け加えた。

「あつ…『ゴメンね。私はリリーよ。クエスト管理人の仕事をしてるので。』

リリーさんか。

「ありがとうございます。」

僕はカーデ…じゃなかつた…キーを指定されたところに差し込む。

ピーと言つ音がして、透明なキーが真つ白になつて出てきた。

「何ですか？これ。」

「それは自分のクエストの達成したつて言つ証拠よ。簡単に言えば
勲章みたいなもの。たくさん持つてると血膿ができるでしょ。」

「そういうて笑うと机に座つた。

「まったく…アリストたら少しは自分で掃除してよね～。」

愚痴をこぼすリリー。

「あの…あとどうすればいいですか？」

「待つて。今やつてるとこりよ。」

リリーはPC(?)を打つていて

「よし終わり。はいこれ。」

渡されたのは変な紙だった。

そこには

報酬金 80000F
感謝金 20000F

と書かれている。

「すいません。これ間違いないですか？」

「間違いじゃないわよ。あなたたちがクエストへ行った後でクエストがBランクになつたから報酬金とかも上がつたのよ。」

そういうやそなこと言つてたつて。祐樹きっと喜ぶだらうな。

「その紙を誰かに渡せば換金できるわ。」

は？

「それってどういふことですか？」

「ここのお金はギルドの中でしか使えないのよ。だからここからお金が出て行くことが無いから、このギルドの中の総額は変わらないの。その紙を誰かに渡せばお金に換えてもらえるし、その変えてもらつた人も誰かに渡せば換金できる。その紙は簡単に言えば利子がつかない貯金つてとこかしらねえ。」

「ここの中でしか使えなかつたら、外の世界に出たときはどうするんですか？」

「あれ？もしかして知らないままクエストに行つたの？」

なんか小ばかにされた気分だ。

「クエストに合わせて食事代とか宿泊費とかは回りの受け渡付でもらえるわよ？」

もつと早く言つてもらいたかった。

もしも安部さんが僕たちにお金をくれなかつたら飢え死にしてたといふのに…

勝手に深いため息が出た。

「クエストの報告はどこですればいいんですか？」

リリーはびっくりしたようだった。

「あなた真面目ねえ…したければアリスにしてきて。全部話しても、話さなくても、どういう風でもいいのよ。」
適當だなあ。

「ありがとうございました。」

僕はアリスのところへ向かう。

「あつ竜。よく眠れた?」

「はい。クエストの報告にきました。」

僕はクエストであつたことをすべて話した。

話がベインのところに差し掛かったとき、アリスが声をあげた。

「ベインに会ったの!?」

動搖しているのが分かる。

「祐樹はベインにやられたのね…」

「でも…どちらかと言づと助けられたんですね…」

アリスがよく分からぬという顔をしている。

「僕たちは…もしベインが来なかつたら死んでたと思います…」

「それは結果であつて、あいつの目的じゃないわ。」

なぜか、悔しそうで、哀しそうで、懐かしそうな気持ちが伝わった。

「あいつは…絶対に自分のために動いている…そうじやなくとも、祐樹をあんな目にあわせたからには絶対に許さない。」

それも含め、世界壊滅を阻止せねば…

「いつか絶対に仕返ししてやるわ。」

「僕も絶対に祐樹の敵を討つ!」

多分祐樹がここにいたら僕まだ死んでないけど…って言われそうだな。

「そうね。」

アリスの顔が穏やかになつた。

「それでアリスに頼みがあるんだけど…」

「分かつてゐるわよ。強く、なりたいんでしょ?」

僕は自分の顔が緩んでくるのが分かる。

「いいわ。本当はクエストで力をつけるんだけどね。」

「お願ひします。」

「そんなに隠せなくともいいわよ。なんか竜、帰ってきてからずっと堅いわよ?」

みんなにはそうやって映ってるのか。

「つらいのは分かるけど、引きずり出せダメなの。もつと強気になつて!」

「強気ですか…『じつやつ』?」

「そんなの自分で見つけなさいよ!それが難しかつたらまず自分のこと、僕じゃなくて、オレへとでも呼びなさい!」

なんか躊躇られて、感じがする…

「オレ…ですか。」

なんかむず痒いと言うか恥ずかしい…

「うううーーあとは自分次第よーー」

そりや、そうだな。よし、強くなればこんな思いしなくていいんだ!

強く、強く。

「じゃあ行くわよ。」

「は…」

返事をするまでに外に来ていた。アリストの力はいいなあ…

「聞きたい事があるんだけど…」

「手短にお願いね。早く修行に励みたいから。」

僕は頷いて話し始めた。

「昨日のクエストで、戦闘が始まったときに周りが黒ずんだ紅のような色で包まれて、みんな動かなくなつたんです…あれって何ですか?」

「あれは紅界よ。^{じゅうか}紅界を張ると、現実の時間と切り離されるの。そこで物とかが壊れても紅界を解けばすべて元に戻るわ。紅界にかかつていなかつたところは、ベインがサービスで直してくれたのよ。」

そのままにしておいたまづがベインにとつて都合が良いのではないのか?」

聞いたら、ベインの目的は世の中を乱すことじゃないわ。と言われ

た…

ベインはなんで世界壊滅を望んでいるんだろう。

「あと、なんか風の球みたいな術のことベインは風球ふうきゅうつて呼んでたんだけ…」

「ああそれは術の名前よ。雷の球とかは雷球らいきゅう、火の玉は火球かきゅう、水の球は水球すいきゅうつて言うの。」

ちなみに水球といつのは言つまでも無く、競技ではない。

「私があなたたちと戦つたときに出した剣のようなものは、雷刀らいとうよ。他も刀で術の名前は統一されているわ。」

術にも名前つてあるんだ。

「他の術はオリジナルとかが多いから名前はそれぞれ違うの。もちろん一緒にもあるけど、そんなの話してたら日が暮れるわ。そんなことよりさつさと修行するわよ…」

「はい…でもどうやって。」

「まずあなたは術について知らなぞ過ぎるからそれを教えなきゃね。

「なんだか長くなりそうだ…」

スイマセン。
無の属性と異の術についてかけませんでした。
次こそ書きます。

「えっとね…」

会話にするとキリがなさそうなので、簡単にまとめることにしよう。まず、術には発動するための力が要る。その原動力のことを魔力って呼んでる。

魔力が多い人ほど強くて、魔力が多い人ほど術がたくさん出せる。しかし、いくら魔力が多いと言つても、魔力の配分をうまくできなければ意味がない。

配分は、アリスとかノワールとかのレベルになつてくると、術に消費するだけで済むそうだ。

でも魔力の扱いが下手な人は術の消費 + 無駄な力を使わなくてはならない。

僕と祐樹は魔力が多いほうだ。（アリスが言つんだから本当だろ？。）

特に僕は魔力だけなら、アリスに「私に劣らないわ。」と言われた。ただ、それと同時に、アリスに「魔力の扱いが下手だわ。」とも言われた。

そこで魔力の扱い方を教えてくれるらしい。

また、魔力の扱い方って言うのは術の力にもかかわつてくるそうだ。扱い方がうまい人は力を研ぎ澄ませて攻撃するから、弱い術でもとても威力がある。

それと人によつて魔力の質は違うようだ。ベインとアリスを比べればすぐに分かる。

「まあこんなところかしら。」

一通り説明が終わつた。

「ずっと気になつてたんですけど、無の属性の人は少ないって言ってませんでした？」

「ええ、言つたわ。」

あつたりと言うが、矛盾しているのではないか？

「でもなんか基本の四つの力を使う人よりも特別な力を使う人のほうが多いですか？」

アリスは考え込んでいる。

「私が説明不足だったわね。」

「あ……とため息をついた。

「いやつ……そんなことは……」

焦つてフォローしようとするとアリスが吹き出した。

「いいのよつ！ それより帰つてきて初めて、竜らしかつたわねつ！」

「そうですか……？」

アリスは笑顔で頷くと、話し始めた。

「無の属性つて言うのはその人の属性なの。異つて言うのは術の種類。異の術でも掠り傷を治す程度の治癒とか、簡単なものは無の属性が無くたつて使うことはできるわ。難しい術は使えないけどね。

あなたは、きっと原子の扱いだけでやつていけると思うけど。」
「ぜひ治癒の術も教えてほしいんだけど……」

まあ、あとで覚えればいいか。

「時間を停止させるのは難しいんじゃないですか？」

安部さんのことと思い出す。

「ん……なんて説明したらいいかな。簡単に言うとね、自分の属性と術とでシンクロする値があるのよ。自分の属性を100に分けたとすると、私は無の属性が45、風の属性が25、火の属性が15、水が10、雷が5つてくらいかしら。」

までまでまで……100に分けた自分の属性のうち、雷の属性は5しかないってことは、最大で術とのシンクロは5だよな……
消費税も馬鹿にはできないね……

「僕たちはどうなんですか……？」

「僕じゃないでしょ！ オレ！」

「そうだった……慣れるまで大変だ……」

「祐樹は前にも言ったとおり100に分けた自分の属性のうち、1

「00が雷よ。でも術とは最大で50までしかシンクロしてないわ。

宝の持ち腐れよ。」

結構サバサバと言つもんだ。

「でもあなたはもつと宝の持ち腐れよ。持ち腐れといつより、宝の不法投棄だわ！まったく…」

力を自分のものにしていないことよりも、アリスの言葉のほうがダメージが大きい…

頭の中で宝の不法投棄という文字がぐるぐると回つていて。

「あなたはね、自分の属性を100に分けると無の属性が100なのよ。」

「はい？」

「みんなの基準だとね。」

「どういうことですか？」

「あなたの力のすべてを100に分けると、無が60くらいで他は10つてところね。でもあなたはとても魔力が多いの。そして強力な魔力を持っている。あなたの60は祐樹の100とほぼ等しいわ。

」

実感がわかない。

「ともかくあなたは強いの！力を自分のものにできればね！」

「そりなんですか。それで、なんでほとんどの他の人は異の術を使えるんですか？」

アリスが目を瞬かせている。

「竜？」

「はい。」

「あなた私の話聞いてたの？」

「はい。」

あつさりと返答する。

「あなた祐樹より馬鹿ね。」

ガーン…

今度は祐樹より馬鹿という言葉が頭の中を回る…

「自分の属性を100に分けたら純粹な属性を持っている人以外は無の属性が少しあるのよ。」

あ…そうだ。

「だから、その小さな無の属性を使って異の術を使ってるの。あなたたちが戦った敵は少し無の属性の割合が大きかつただけよ。」

あ…祐樹より馬鹿かも…

「みんな自分の属性のなかで30以上あるものは1つしかないの。1人を除いてね。それがその人の主な属性となるわ。」

祐樹より馬鹿…祐樹より馬鹿…

「ちょっと…聞いてる！？」

「はい…」

力無き返事を返す。

「もう…強くなりたいんでしょ…」

「はい！」

力を込めて返事を返す。

「よし、じゃあ修行するわよ。」

「はい！」

「はい、はい、うるさいわ。」

「すいません…」

ぐさつと心に来た言葉…本日3度目…

「じゃあ始めるわ。まず、地面を分解してみて。」

手をかざそうとしゃがむ。

「待つて。」

「え…しゃがまないと無理ですよ。」

は…アリスは深いため息をついた。

「簡潔に修行の内容を言つておくわ。1つは魔力の配分をうまくできるようになること。もう1つは想像力をつけることよ。」

想像力？

「なんで想像力がいるんですか…？」

「ホンッと馬鹿ね。」

ぐつむ……。印度田。

慣れてきてしまつた……。そんな自分が悲しい。

「想像して創造するのよ。」

よく分からなかつたが、もう聞く勇氣は無い。

「まず……何をすればいいですか？」

「まずは魔力の配分をうまくできるようになつてもらつわ。配分がうまくできるようになれば遠くのものとかも分解したり遠くで構築したりできるようになるから。」

「でも……せいぜい分解できるのは500mくらいの距離じゃないと……」

「その距離を伸ばすための修行でしょ。いくら良い人材でも磨かないと輝かないわ。頑張りましょ。」

きっと厳しい修行になるんだろうなあ……

こつちを見てにっこりとするアリスト。

きれいな笑顔がまた悪魔に見えた……

琢磨（後書き）

「朗讀有難い」と書きました。

無の属性と異の術について分かりにくい説明でスイマセン。
理解していただけたら嬉しいです。

イメージ

はあ……つまんないや……

動かないと、こんなにつまらないものなんだ……
かといつても動くとこもあまりできない。

はあああ……

「こんなんじゃ余計体に悪いよ……
……あみよ……」

傷が疼く……

この傷、毒でも入ってるんじゃないのか……
竜はなんか修行してるっぽいし。
置いてかれたら怖いなあ……

はあああああ……

「まじめじつ！ もうと氣合込めて！」

「んぐぐぐぐぐううう……」

立つたままの状態で地面を分解しようとする。
少しだけ地面が消えてきた。

「その調子よ！ もつと力を練り上げて形成まで持つてく！」

精一杯の力を出しているつもりだ……

原子を立方体に組み立てる。まだ完璧ではないが、ぼんやりと形ができるてきた。

よし。

あ……崩れた。

「こりつ！ 気抜いちやダメでしょ！」

「ふう、ふう……はあ……アリス……これ、逆に無駄な力、使つてゐ
氣、するんだけど……」

僕は……じやなかつた……オレは地面に大の字で倒れこむ。

空はとても澄んでいる。とは言え、真っ白だが…

「その無駄な力を使わないようにすれば、きっとできるわよ。そのための修行だし、いきなりできるほうがおかしいわ。」

そのとおりだ…

「なんか、コツとか、ないんですか…？」

「コツねえ…」

アリスが考えているうちに息を整える。

「コツは人や、術によって違うわ。私は…そうね。昔、新人だったころは、空気中に真っ直ぐできれいな直線を頭のなかに描いて、そこから張り裂けるようなことをイメージしたわ。」

「それってアリスの術限定ですね…」

「そんなことは無いわよ。あなたの場合だつたら術をかけるものと、自分を細い直線で結んで、そこに力を流し込むようにするのをイメージしたらどうかしら？」

「おおー、それはいい考えだ。

「あくまでも私のイメージだからあなたに合つかどうか分からな

わよ。」

「やつてみます。」

「細いほうが力の量が少なくて済みそうな感じがするわね。」

なんだか滅茶苦茶な理論だが、細い糸を想像する。

僕の手と、床を細い糸で結ぶ。

もちろん、曲線にならないように真っ直ぐをイメージする。

そつと糸が切れないように力を流し込む

え？

「うわつ…」

「つきやつ…」

力が地面に到達したときだつた。

突然、僕たちの立っていたところが半円状になくなつていた。

「ちょっと…ちゃんと力の制御しなさいよつ…」

「ん…「メン。」

さつきアリス、「きやあ」って言つたぞ…

あまりにも似合わない…

「私のイメージがあなたのイメージにピッタリだなんて…よかつたわね！」

嬉しくて、思わず口元が緩んできた。

「あとはぼ…オレが力を制御するだけですねっ！」

アリスがふふつと笑う。

「今日はここまでにしましょう。しつかり寝て、魔力を回復しない。明日に備えてね。」

イメージ（後書き）

最後まで読んでください、有難うございました。
次回も修行の続きです。
徐々に力を使えるようになります。
見守ってやってください。

和やかな時間

竜をつれて本部に戻った。

竜は何やら料理人と話しているようだ。

彼のほうは順調ね。

祐樹が心配だわ。

きっとベインの術のことだから治りが遅いわね…
でも…治るんだから気長に待ちながら、竜を強くしていきますか…

つうまああんなあああい！

「あ～！もう限界っ！」

そういうやクランが遊びに来てつて言つてたつけ。
遊びに行こう！

部屋を飛び出すと、クランたちの部屋を探す。
確か…0805室つて言つてたつけ？

我ながらナイス記憶力っ！

つつ…腕がたまに痛む…

でも我慢、我慢。

おっ発見！

部屋をノックする。

「は～い。ちょっと待つて。」

ん？クランじゃないぞ…

ドアがぱっと開く。

「どなたかしり？」

出てきたのはヘレンだった。

「ここにちわ。クラン…いるかな？」

「クランは今どこが行つてるわよ。確かあなた祐樹君だけ？ビリ

ぞ、入つて。」

「お邪魔します…」

女の子の部屋に入るのは初めてだ。緊張するな。

「ソファーにでも腰掛けて。あたしあお茶入れてくるから。」

言われるがままにソファーに座つてあたりを見渡す。正直言つて僕たちの部屋とそんなに変わらない…

「そういえば、昨日の怪我大丈夫?」

お茶を運びながら聞いてきた。

「うん。平気だよ。たまに疼くけど…」

「あんまり無理しちゃダメよつ。」

心配してくれているようだ。嬉しいな。

「祐樹君つて確かあたしと一緒に雷の属性よねつ?」

「うん。あんまり使い方がわかんないけど…というか祐樹でいいよつ。」

「そつか。でも使い方なんて自分で考えればいいんじゃない?」

確かにそつかも…

「あとは修行してうまく術を使えればそれでいいじゃないつ。」

ヘレンがにこやかに笑う。

初め見たときよりも、近くで見るとずつとかわいい。

「どうかした?」

思わずはつと/orする。見とれてしまつていた。

「いや、なんでもないつ!」

焦つてドキドキする。

「祐樹つて面白いね。」

「あ…もう死んでもいいかも…(よくないつー)

「祐樹はなんでこのギルドに入つたの?」

「ん…僕のせいでも竜を巻き込んだんだ。」

竜のPCを勝手に触つて、ベインの空間に入つてからアリスに捨てられた(さらわれた?)ことを話した。

「そつなんだ…インターネットも危険がいっぱいねつ!」

笑顔で切り替えてくるけど、危険がいっぱいでは誤解を招いてしまつ。

まあいいか。

「ヘレンはどうして？」

笑顔が急に消えて、悲しそうな顔になった。

「あつゴメン…いたくなかったらいいんだつ。」

あわてて付け加える。

「あたしは…分からぬの…」

すごく重い空気が流れ、部屋が静まり返る。

再びヘレンが口を開いた。

「あたしね、このギルドに入る前の記憶が無いのよ。それまでどうやって生きていたかとか、まったく覚えてないの…」

悪いことを聞いてしまつた…

「ゴメン…変なこと聞こちやつて…」

「いいのよ。今はこここの記憶があるから。」

ヘレンの笑顔はさつきよつとらやうだつた。

それから色々話した。

竜がどうとか、クラシがどうとか、好きなものは何とか、どんなクエストやつたかとか。

「あなたたちタッグ名は何にしたの？」

「えつと、竜が無属性で、僕が雷属性だから、無雷にしたんだつ…」

自身満々で答える。

「え…あ…い…、名前ねつ…」

なぜかヘレンの反応がおかしい…

「どうしたの？」

ヘレンが、言い難そうに言つた。

「無雷だと…まるで雷がないみたいじゃない？」

僕は顔から火が出るかと思つた。

竜の意図を気づかせてありがとつ。

竜の一発殴つてやるうと心に決めた。

しかし、まずこの空気を直してほしい…

そんなこんなで、楽しく過ごしていたらだいぶ時間がたっていた。

「僕そろそろ戻んなきや。」

「そう。また遊びにきてね！」

「ヘレンと話せた。感激だ！」

それにしてかわいかつたなあ…

また遊びに行こうと！

「本つ本当に申し訳ありませんでした！」

「いいよいよ。こうやってお金返してもらつたことだし。これからもよろしくね。」

ふう…これで祐樹のツケが無くなつた。

あいつどんだけ食つたんだ…

手元には1000000円あつたはずだが、桁が変わって10000円になつていて。

これのどこが平等だ…

仕方ない。あいつ、頑張つてたしサービスしつづけ。

部屋に戻ると祐樹はいなかつた。

怪我してんだから動くなよな…

あいつはあいつなりに何かしてるのかな?

まあいいや。オレは祐樹の親じやないし。

わざわざと寝て、明日の修行に取り組むぞつ！

和やかな時間（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。
今回は修行を書くつもりでしたが、下手な言葉の使い方しかできず、
文が長くなってしまったので変更しました。すいません。

おしゃべり…

翌日…

ここで寝るのは3回目くらいだが、毎回のことががら違和感を感じていた。

それが今回ようやく分かった。

多分、寝ている時間が常に一定だ。

なぜ余計なことに気がつくのだ…

起きて…オレの部屋から出たが、祐樹はやっぱり居ない。

寝ているのだろうか？

シャワーを浴び、ロビーへ行くと、いつもどおりアリスがいた。

「準備はいい？」

「もちろん。」

そう答えたことに外だった。

「さて、はじめるわよ…」

アリスは一体いつ寝て…いるのだろう…

「今日は何をするんですか？」

「決まってるじゃない！昨日と同じよ。」

またか…

3時間ほど練習して、やつと少し制御できるよつになつた…

「よし、じゃあ今日は終わりね。」

「え…？ もうですか…？」

「1日3時間までにしどかなきや体壊すわよ。

気使つてくれてるんだ。」

「また明日お願ひします。」

本部に戻った。

なんかこれから暇だな…

1人で行けそうなクエストでも行つてみよう。

「ふああ～」

田覚めると、竜はいなかつた。

「ん～…修行でもしてるのかな？」

この惡々しい傷さえ早く治つてくれればいいのに…

さすがに2日連続でクラシのところ押しかけると迷惑だよなあ…

今日は部屋でおとなしくしてこよひ。

クエストボード眺めながら一人で行けそうなクエストを探す。
これならいけそうだ。

ランクD

＜依頼内容＞

私、イノシシ汁を食べたくなつてしましました。
しかし、イノシシは怖くて狩れません。
どうかイノシシ狩りを手伝つてください。

契約金	200F
報酬金	1500F
感謝金	契約金×2 + いつしょにイノシシ汁を食べましょ。

イノシシ汁といつものが食べられるかどうかは置いておいて、イノシシの討伐だけだな。
簡単そうだ。

「こんなにちは。用件は？」

机が話しかけてくる。

「クエストに行きたいんだけど。」

「かしこまりました。」

「場所は…どこだ？」

日本じゃなさそうだ。

「アリス…は…いないな…」

周りを見渡す。

「すいません。これってどうですか？」

目の前にいたリリーに聞く。

「まあどこでもいいんじゃない？」

「なつ…何て適当な…」

「はいこれ。」

渡されたブレスレットは、前にもらったブレスレットとは色が違つた。

「タッグで行くときは個人で行くときは色が違うのよ。他は変わらないから安心して。」

「言葉…通じなかつたらどうしましよう。」

「そのブレスレットが翻訳してくれるわ。」

「おお。便利なものだ。」

「ありがとうございました。」

次に、ことと反対側に歩いていく。

「すいません。クエストに行くのでむいつの世界のお金受け取りたいんですけど…」

「ランクは何かね？」

知らないおじさんが応えてくれた。

「Dランクです。」

机の中をがさがさと探ししている。

「はいよ。」

一万円札が渡された。

「ありがとうございました。」

よし行くか。

「出る、

心の中で念じた。

体が軽くなつた。

着いたのは…山奥？

「やあ、待つていたよ。早速だが、イノシシを狩りに行こう。」

「はい。」

早速イノシシを発見。

「ぎゃああああ！」

何！？依頼主が僕の後ろに隠れよつたぞ！

「仕方ない、修行の成果を見せてやる…」

床に手を向けて、細い糸をイメージする。

「ぎゃあああ！来る！来る！…」

「え？」

バコーン！

「いつてえ！」

「ちょっと…何やつてるんですか！？早くたおしてやださこよつ…」

術の発動までに時間がかかりすぎるなあ…

次はそこを練習しよう。

「失礼ですが、あなたのその背中の銃をお借りしてもよろしいです

か？」

「いいよいいよー早くしてくれー！」

イノシシがこちらを見て、走る構えをしている。

さて、

「この銃つてどうやって使うのですか？」

オレは世の中じゃまともに生きてきたほつだ。

無論、使い方など知るはずがない。

「ぎゃー来るつ来る！」

「早く使い方を教えてくださいー！」

「貸して！」

依頼人は逃げながら銃を構える。

ドカーーーン！

見事に腹に命中する。

何発か打ちまくる。

イノシシが動かなくなつた。

「おめでとうござりますっ！」

「なつ何言つてるんだ!? 君は結局何もしてくれていないじゃないかっ！」

泣きながら叫びまくる。

「そうですね。でもこれで、これからいつでもイノシシ汁が食べられるじゃないですかっ！」

多分オレの笑顔は、そこで喚いている人にとつて悪魔に見えたことだろう。

その後、彼の家へ行つてイノシシ汁を食べたが、微妙だつた。

「ありがとうございました。」

帰り際に、キーを渡してきたが受け取るのを拒んだ。だって何もしてないし、自分の力の弱点が分かつたからそれだけで十分だ。

〈入る〉

心の中で念じると、体が軽くなる。

ついたのはいつもと変わらないロビーだった。

ねここくへなこ…（後書き）

読みでくだれり、ありがと「い」れこもった。
今回まのせせんとした感じの雰囲気を漂わせてみました。

そんなこんなで2週間ほど修行とクエストを繰り返していた。こここの所、祐樹とはまったくあってない。

今日もいつもと同じ修行のつもりでアリスと外へ移動する。

「そろそろ力の制御も、術の発動時間の短縮もできてきたといふだし、今日で最後ね。」

「もう終わりですかっ！？」

アリスはあきれたようだった。

「分かつてないわね。クエストはお金を集めて道楽するものじゃない。お金を集めるためにクエストがあると初めに私は言ったかもしれない。でも、それは結果であって目的ではないのよ。」

よく意味が分からぬ。

「本当の目的は力をつけて、ベインの陰謀を阻止することだつて！」

「そういや、そうでしたね。」

忘れていた。でもオレの目的は違う。誰にも傷ついてほしくないことをだ。

「だからもう、クエストで力をつければいいのよ。あとは…あとは…なんだ？」

「私が最初に言つたこと覚えてる？」

「たしか、魔力の配分の仕方を修行するつて…」

「もう一つ言つたはずよ？」

「なんだつたつけ…」

思い出した！

「想像力…ですね。」

「そうよ。なぜ必要が分かる？」

「想像を創造する…ため？」

「分かつてるじゃないつー！」

いや、言つておこづ。

アリスが前言つたことをそのまま言つただけだ。

「無の属性の人には想像力がとても大切になつてくるのよ。特にあなたのような力の子にはね。」

「力だけではダメつてことですか?」

「そのとおりと言つ顔をするアリス。」

「あなたは治癒の術とか必要ないのよ。」

「え!?でも…誰かを助ける力がほしいんですけど…」

「だから、想像力が必要なのよ。」

「ピンと来ない。」

「例えばここで傷ついている子がいるとする。その子を助けるにはどうする?」

「ギルドへ戻る…」

「違うわよ!」

アリスがむきになつてている。

「あなたが助けるの。あなたの力でね。」

「治癒の術なんて知りませんけど…」

「傷口を原子で分解して元の皮膚に再構築すればいいじゃない。」

あ…

「そうすれば元に戻るわ。」

「それって…」

「そう、誰にも劣らない治癒の術が使えるようになるわよ。」

につこりとするアリス。

「でもこれはあくまでも私の想像よ。だからあなたの想像を、現実とするの。分かった!?」

「はいっ!」

僕は神に嫌われて力を授かつたと思つてた。

違つた。

きっと僕は神に愛されているんだ。

なんて素晴らしい力だろ?」

「これで修行は終了よ。また、本当に力が必要になつたら来なさい。」

「ありがとうございました！」

「なんでもう…この頃竜とまつたく会わないなあ…
ヘレンが言つには、睡眠時間は、一度寝ると6時間。ぴったりじ一
から寝る時間がずれているのだろう。
傷の痛みもほぼ無くなつた。
よしつ！竜と一緒に修行に励むかつ！

本部に戻ると、祐樹が居た。

「祐樹つ！なんか久しぶりだなつ。」

「うん！目が覚めると竜、いつもいんじんだもん。」

久しぶりに見た祐樹は何も変わっていない。

「竜、なんか雰囲気変わつた？」

「ああ…うん。ちょっとかわつたかもね。」

「まだ強気になるのは慣れていない。」

「そうだ！そろそろ傷が治つてきたから、僕も修行に付き合わせて
よつ！」

目を瞬かせて、アリスと顔を見合わせると、吹きだしてしまつた。

「ゴメンつ祐樹。今日ちょうど修行が終わつたところなんだ。」

「え。」

呆然とする祐樹の顔が目に映る。

笑いを必死にこらえた。

「僕だけ置いてけぼりじゃないかつ！」

「むきになつて話す祐樹はホントに何も変わっていない。」

「大丈夫だつて。今度アリスに特訓頼めばいいさ。」

納得したのか、静かになつた。

「明日か明後日にはクエスト行こうな。」

笑顔になる祐樹。

「当たり前じゃないかっ！」

「ん~。我ながら自分の作り出した空間の中でも見る月は美しいねえ。」

会議でもしているのだろうか。

丸く並べられた椅子はそれぞれ種類が違う。空中にモニターが映し出される。

「あの子達は順調ですねえ。」

「そうね。いずれ大きな力となつてくれるでしょうね。うふふ。」不気味な雰囲気。

「何でベインつてば、あの子達ばつか見てるのつ！？僕だつて強いじゃんつ！」

子供がベインのひざの上で拗ねている。

「キューーブ。君には戦う必要がないのだよ。私たちファミリーは子供を前線に立たせるようなことはしないさ。」

につこりするキューーブ。

「じゃあ、死んでもいい子がほしいんだねつ！」

口元だけで笑う。

「そうだよ。いい子だ。よく分かってるじゃないか。」

「いつまであの子に纏わり着くつもりだ？」

男が声をかける。

「纏わり着くとは嫌な言い方だねえ。NO8の男、クリアよ。」

対抗するように嫌味を言つベイン。

「オレがNO8でどじまつてているのは、単に8と言つ数字が好きだ

からだが、文句あるか？

「ちょっとやめなさい！」

「なかなか賢明な考え方だよNO7、ローズフィリア。」

女は冷静に対処する。

「私たちはファミリーです。仲間内で喧嘩しても仕方ありません。」

「喧嘩なんてしないよおー。ベインは仲間を傷つけたりなんてするもんかっ！」

不気味な笑いをするベイン。

「やっぱりキューブはよく分かっている。私は仲間には手を出さない。安心してあの子達を見守りなさい。ゆっくりとあの子達が絶望していく様を見ようではないか。」

月が闇の中で笑っていた。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
修行もやっと終わり、クエスト再開です。
ベインたちは何をたくさんしているのでしょうか。

黒い薔薇

「うわっ！」

ぐさり。刺のようなものが祐樹の周りに突き刺さる。

「祐樹、最後だからって気抜いやだめだ！」

「分かつて、気なんか抜いてないっ！」

周りは紅界が張つてある。

修行で紅界の張り方は教えてもらつた。

「ふふふ…よく避けてるわねえ。」

氣味の悪い、黒い薔薇が話した。

「お前、動けないんだろ！？」

槍のようなものを薔薇に向けて飛ばす。

「あら、そんなこと無いわよ。」

下からツルが出てきて打ち落とされた。

「体 자체は動けないってことじやん！」

後ろに周り込んでいた祐樹が雷球を放つ。

「だからそんなこと無いってば。」

ツルが薔薇を持ち上げる。

「空中じや身動きできないでしょ…」

「しまつたっ！」

祐樹がもう一度、さつきより力をためて雷球を放つ。

「なんちゃつてね。」

薔薇の前にはツルを編んで出来た、網のような盾で防がれた。

「防がれることなんて百も承知だよつ…」

オレはすかさず槍を飛ばす。

もちろんんさつきより全力で。

「いつけー サウザントスピアー！」

「きやああああ…」

やつた。薔薇はすぐに朽ちていく。

「おのれえ……」

薔薇が消滅した。

「ナイス竜っ！」

「ちらへ駆け寄つてくる。」

「お前もナイス陽動だつたぜ！」

「ありがとう。でも竜、サウザントスピアはないんじゃない？」

少し引いている祐樹。

恥ずかしくなる……

「つるせーつ！」

紅界を解く。

「ありがとうございました。あの薔薇があんな怪物だつたなんて……」

オレはキーを受け取る。

「いえつー困つてゐる人が居たら、例え無償でも働きますよつ……」

おじさんは苦笑いしている。

「では失礼します。」

〈入る〉

と念じた。

さて、なぜこんなことになつてゐるか。

オレは修行がやつと終わり、祐樹と一緒にクエストを探していた。そのときに、アリスから「あなたたちにCランクのクエストで頼みたいものがあるの。このクエストがうまくいったら、Cランク術者として認めてあげる。」と言われた。

祐樹は大喜びで、オレも、不安もあつたが嬉しかった。

そして、それと同時に「危険なクエストになるかもしねり。気を引き締めて。」とも言われた。

内容はこうだ。

ランクC

＜依頼内容＞

全国各地で黒い薔薇が見つかっています。
その薔薇は一見、美しいだけに見えます。

しかし、その薔薇を探ろうと手を伸ばしたとき、噛み付いてきたのです。

この世の理から離れているものだと悟りました。
その薔薇のせいで、死んだ人さえあります。

被害は深刻なものです。
世界がパニックに陥る前に、すべての薔薇をどうにかしていただきたいのです。

契約金	1000F
報酬金	1つの都道府県につき、500000F
感謝金	契約金×5

場所は日本だった。

この依頼をアリスは深刻に受け止め、1つの都道府県に、1タッグの術者を向かわせた。

1つの都道府県に責任者1人がいるからその人の言つとおりに動く。
「絶対死んじやダメよ。」

最後にそう言われた。

なぜか、その言葉がとても重く感じられた。

本部に着くと、怪我をしている人がたくさんいた。
その中に、クランとヘレンもいる。

ほとんど無傷なのは僕たちだけだらう。

クランは軽症だが、ヘレンは腕に深い傷を負っている。

「ヘレン！大丈夫！？」

まさか、一番に駆け寄つていくのが祐樹だとは思わなかつた。
というか、いつの間にそんな親しくなつたんだ。
いや、そんなこと言つてる場合ではない。

「クラン、大丈夫っ！？」

僕も素早く駆け寄る。

「私は平気よ！でも、ヘレンが、ヘレンが私を庇つて…」

クランは泣いている。

「クラン！何言つてるの！？あたしは重症かもしれないけど、死ぬ
ことは無いから大丈夫よ。泣かないで。」

怪我をしているほうがしていないほうを慰めるのは変な光景だ。
「ホントに大丈夫？」

祐樹の真剣な顔を久しぶりに見た…

ヘアリーは他の怪我人を治すことで手一杯だ。よし、修行の成果を
発揮するぞっ。

「祐樹、ちょっと退いて。」

「何するんだよっ！」

「治すんだよ。文句ある？」

祐樹はおとなしく退いた。

手を傷口にそつとかざして、細胞を作り直す。

予想以上にうまくいった。見る見るうちに怪我は治つていく。

「うわあ…竜っ！ありがとっ！」

クランが飛びついてきた。

「っちょ…」

恥ずかしくて戸惑つ僕を無視し、泣きながら何度もお礼を言つクラ

ン。

ヘレンは腕の調子を確かめているようだ。

「竜、いつの間に治癒の術覚えたの！？」

祐樹は嫉妬しているようだ。

自分の性格の悪さがこいつこいつによく分かる。

「教えてあげないつ！」

「つちえ。」

「竜、ホントにありがとう。助かったわ。これですぐクエストに戻れる。」

え？

「もしかして、ヘレンってクエストの途中で帰ってきたの？」

祐樹が探るように聞く。

「いえ…一応すべての薔薇は破壊したわよ。」

「じゃあどうして？」

クランがあとを引き継ぐ。

「薔薇が増殖してゐらっしゃのよ。私たちが倒したあとで、また依頼が来たようなの。」

「祐樹、もしかして愛知県も増えてるかも！」

「ええ。そのとおりよ。」

後ろにはリリーがいた。

「みんな！静かに聞いて！」

ロビーにいたみんなが静まり返る。

「Cランクの薔薇のクエストで、今から言つ都道府県に配属されて

いた人はもう一度向かって！」

リリーが都道府県を読み上げていく。

「…………以上。呼ばれなかつたといひは傷の手当をしながら待機！」

静まり返つたロビーがどつと騒がしくなつた。

「僕たちのところ…まだね。5体も倒したのに…」

「おう…何が起きてるんだね。」

「

「僕たち行かなくちゃ。へレンはビルに配属されてるの？」

「私たちは岐阜県よ。近いわね。」

「つーつーとしたが、県と県は案外遠いことを知らないのか？」

「祐樹、行くぞ。」

オレはもう行く準備をしていた。

「分かった。共に無事であることを祈るわー。」

祐樹が一いつひらへ来た。

「出る、出る！」

そうい念じた。

「始まつたかね？薔薇の侵略は。」

「あの子達が順調なよう、一いつひらも順調よ。」

ローズフイリアが答える。

「なんせ2週間もあつたからな。他のものたちも準備は出来ていいだろ？」

「みな無言だ。」

「返事がない、と云つことは準備万端とこいつとド進めさせてもらうよ。」

「もし準備が出来て無くても、僕たちは止められないよー。」

キューブが笑う。

「準備が出来ていなければ、今のうちこいつは、まだいい。」

「ローチャンのあれって意味あるの？」

ベインはワインを飲んでいる。

「ローチャンの子がゲームをやりながら聞いた。」

小学生くらいの子がゲームをやりながら聞いた。

「私のことローチャンって呼ぶのやめてよおなー。それこいつちゃんと意味あるんだからー。」

「出る、出る！」

「あ～あ～死んじゃつたあ。まあいいや。」

「ちょっと聞いてないじゃないつ！」

なんだか賑やかだ。

「ゲームばかりしてないでちやんと準備をしろ。お前が準備を怠つてているのは分かつていてる。」

少しお怒り気味なクリア。

「クリアは真面目すぎるんだよー…」

「いや、クリアの言うとおりだ。ちやんと用意されたことは果たす。それがファミリーの掟だろーっ！」

「はあ～い。」

少年はどこかへ消えた。

「計画は順調だ。この辺にもやもやのそろ移動する準備をさせないとな。

「

黒い薔薇（後書き）

最後まで読んでくださり、有難うございました。
大変なことになつてきましたね。
自分で言つのもなんですが、初めのころに比べてだいぶまともに書
けるようになつて来た気がします。
これから戦闘続きとなると思うので、これからもよろしくお願ひし
ます。

わざと来たとおと回じ場所に着いた。

「うわっ…わざより、10体くらい増えてるよ…」

「あ…一回ずつ倒して回り。」

安部さんとの戦いがあつてから、オレたちは魔力を察知できぬゆつになつた。

だから薔薇がいる場所や、大体の数は分かる。

「どこから行く?」

「一番近いところから効率よく。」

走つていると、だんだん薔薇に近づいているのが分かる。

「近いよ。」

「分かつてる。」

周りを見渡す。

「あつた!」

祐樹の掛け声と共に、紅界を張る。

その黒い薔薇は紅界を張つたとたんに、変化した。

徐々に大きくなり、やがてさつき戦つた相手くらいの大きさになつた。

「あ…見つかっちゃつた。」

お遊びのよくなセリフだ…

出来る限り不意をついて破壊したかった。

「竜、あんまり飛ばしちゃダメだよ。まだたくさんいるから…」

分かつてる。

小さな声で、最速で、出来る限り力をあまり使わなくて良い作戦を立てた。

「何こそこ話をしているのよ。」

ツルをムチのよづにして攻撃してくる。かわした。

オレはすかさず薔薇の後ろへ回り込む。

祐樹は手に雷刀を持つて、その場から動かない。

「そんな短い剣じゃ当たんないわよー。」

ツルのムチで祐樹に攻撃しまくる。

「ぐ……」

祐樹はすべての攻撃を防ぎきれていない……

急がないと……

あと少し、あと少し……

着いた！

あとは鉄の原子を集める……よし、鉄球ができた。

「祐樹！いいぞ！」

合図と共に薔薇に向かつて走つてくる。

オレと薔薇は一直線上にいる。

「いっけー！」

祐樹が薔薇に向かつて雷球を投げつける。

「当たるわけないじゃない。」

上へ飛んで、避けられた。

その雷球はオレに向かつて飛んでくる。

鉄球でその電気を吸収する……

その鉄球を、思いつきり、あいつに向けて、

「飛ばす！」

鉄球はあいつに当たる。

「ふ、こんなもの痛くも痒くも……」

鉄球は電磁石となつていて。

それに向かつて鉄の原子を纏わせた電気の使い手が飛んでゆく。
雷刀が薔薇の体を切り裂く。

「う……」

薔薇が朽ちていき、消滅する。

祐樹が格好よく着地した。

「竜つ！」

駆け寄ってきて、オレの体に祐樹が触れた途端に痺れが消えていく。

「大丈夫？」

「ああ。大丈夫。お前こそ攻撃何発か受けたろ。」

「そう言いながら祐樹の傷を治す。」

「この作戦は今度から使わないようにしてよ…」

「そうしてくれたほうありがたい。」

「ふう…」

「あまり魔力も体力も使つてない、このペースで倒していくぞ。」

「無理っぽい…」

「あ…」

「そうかもな…」

オレたちは戦闘に夢中だった。

魔力で、敵の強さは大体分かる。

今、倒した敵は僕たちで倒せるレベルだ。1体か2体なら…

「どうしよう…」

周りには、8体の薔薇がいた。

「困まれた…勝てそうにないな…」

「まだ戦闘に夢中で、私たちに気がつかないなんて、経験不足のハンターってところかしら？」

そいつの言つとおりだ。

「さつさと倒してローズフイリア様に報告したいわ。協力しましょう。」

ローズフイリア？誰だ？

「竜、まずい！早く逃げよう！」

あいつらは腕を絡み合わせて一箇所に集まっていた。

「合体でもするつもりか…」

「合体されたら多分、勝てない…」

「あ…分かつてている。」

「魔力の大きさが半端じゃない。」

オレたちは走り出す。

「出来る限り逃げないと…」

「ちょっと待つた！」

オレは祐樹を止める。

「逃げても、どうせ追いつかれる。無駄な体力は使わないほうがいい…」

「そうだね…」

立ち止まると、急に怖さが込み上げてきた。

逃げていたほうが絶対に怖くない…

でも、倒さなければ意味はない…

「あら…賢いじゃない。少しほのめがいいのね。」

やつぱり…

薔薇の集合体は、僕たちの逃げようとしていたところに先回りしていた。

「あなたたち遅すぎるわ。普通に走つてたら追いつかれるに決まってるじゃない。」

とんでもない魔力を感じる。

でも…ベインとは比べ物にならないほど小さい…

「なんかさっきまでの面影全然ないね…」

「そうねえ…こっちのほうが…美しいわね。」

祐樹、お前のキモはすごい…化け物と会話しているとは…

いや、見掛けは化け物でないからまだ会話できるのだろう…

「竜…あいつ人型になつた…ヘレンに聞いたんだけど、人型はヤバイんだつて…知能も高くて、移動も早い、そして何よりこの魔力…」

「ああ…人型は危ないことは分かつた…次があることを祈つて、次から気をつけるよ…」

「ふふ…次があると思う?」

な…人になつた薔薇は僕たちの後ろに移動していた。

「いいこと教えてあげる。魔力を足に集中して動けば、少しほのめがいいこと

なるかもね。」

あの薔薇は確実に楽しんでいる…僕たちにアドバイスして、長い間楽しもうとしている…

「せいぜい楽しませてよ。」

「君は…なんて名前なの？」

おい、祐樹：この状況で名前聞く」とはないだひつ…

「名？さつき出来たばかりにあるわけないじゃない…」

そりゃそうだ。

「まあ合体して出来たものたちはユニークって総称で呼ばれるわね。」

「そうか。」

「でもあなたたちには関係ないわ。すぐに死ぬんだもの。」

「誰が？」

そのとき、祐樹が一瞬消えた。

そしてユニークの首を雷刀で切り落とした。

「な…なんで…」

「ユニーク、君が教えてくれたんじゃないのか。」

「く…教えるんじゃなかつた…まあいい…他にも私のようなものはいくらでも…」

消えた。

オレは何も出来なかつた。

「ゆ…祐樹つ！」

「ああ竜、物は試しだねつ…」

聞いたことをすぐに実行するなんて…

「無茶すんなよ…でも助かつた、ありがと。」

くそ…

オレは2週間修行してたんじゃないのか？

何をしていたんだ…

反吐が出る…

実践で何も出来なかつたら意味はないんだ。

「ローラー帶の薔薇は無くなつたね……」

「ああ……あー……」

「まことにござつた。

「どうしたの?」

「最期にあいつが言つた言葉……」

祐樹も気がついたようだ。

「他にもコニオンはこる……」

そして、瓶をそろえて叫んだ。

「クラシとヘルンが危ない!」

ハーリン（後書き）

最期まで読んでくださつて有難いございました。
戦いはまだまだ続きそうです。
末永く見守つてください。

絶体絶命

「あ……あ、

「うつ……」

腕に激痛が走る。

「きやあつ！」

「何よ、この子達。まったく相手にならないじゃない……」

クランが足を捕まれて宙吊りにされる。

「ぐ……はあ！」

ヘレンは血の滴り落ちる腕で必死に雷球を放つ。

「こんな死に損ないの攻撃食らつものですか。」

片手で弾かれる。

「まさか……ユニオンが相手なんて……」

絶体絶命の状態だ。

「ヘレンは強いのよ……私さえ……私さえ足を引っ張らなければ……」

「ほう……よく分かってるじゃないの。じゃあ死んどく？」「

そのとき、クランの足から輝きが放たれた。

「つきや……何よこれつ！」

「クランつ！？」

「大丈夫よヘレン。私がやつたんだから。」「

ヘレンは啞然としている。

「私ね、いつもいつもヘレンにばかり迷惑をかけて嫌だと思ったの。竜を見て思つたわ。私が変わらなきやダメだつて。」

「クラン……」

「だから一番シンク口値が高い無の属性で、オリジナルではなく、故人の残していった術を身につけたの。」

「それは……それは何だ！？」

まだクランの足は輝き続けている。

「そんなこと知る前に、あなたは光の速さで死んでくわ。」

クランが消えたと同時に、ヨニオンは真っ一いつとなっていた。

クランの手には風刀が握られている。

目で追いつくことが出来ないスピードだ。

ヘレンの元へ歩いていく。

「それは一体…何？」

ヘレンは愕然としている。

「これは光の靴シャイニングブーツよ。光の速さで移動できるようになるわ。でも……」

クランが途中でへなへなと座り込む。

「クラン！？」

「大丈夫…この術は、相応の体力と魔力を使うの。だからあんなやつには使いたくなかった…もっと修行しないと、多用は…ダメね…」

息を切らして話す。

「心配させないでよ……でも借りが出来ちゃったわね。」

にこつとするヘレン。

「私が受けた借りはこんなものじゃないわ。これからもつとじつかり返していくんだから…」

ヘレンが魔力を察知した。

「また…何か来るわ！」

「大丈夫よ…こっちに向かってるコアは光…どんなに離れてても、どんなに小さくても光のコアは目立つのよ。闇の中の灯みたいにね

…」

くつそ……

もつと早く、もつと早く。

「竜つ！早く！」

「分かつてる！」

祐樹は魔力のコントロールがうまい。
悔しいが、ついていくので精一杯だ。

「いた！」

すぐに地上に降り立つ。

足場が安定したところに立つのはすこく楽だ。

「ヘレン！腕、また怪我したの！？大丈夫！？」

すぐさま駆け寄るが、祐樹ほど気の利いた言葉はかけれない。
言葉より先にヘレンの腕を治す。

祐樹はさつきから心配してばかりだ。

「怪我…ひどいね…」

「クランに助けられたのよ…」

それにはオレがびっくりした。

「すごいな…オレとは大違いだ…」

「そんなことないわ。私が変われたのは竜のおかげだもの。
にこつとしたが、顔が引きつっているのが分かる。

「足、怪我してるじゃないか！」

すぐに治そうとする。

「ダメよ！」

え…びっくりした。こんなに拒否されるとは思わなかつた。

「私の回復に魔力を使つて、こぞといつ時に使えなかつたらどうするの！？」

「仲間を助けるほうが大切だ。」

きつぱりと言うと、おとなしくなつた。

「こんなの擦り傷だから大丈夫なのに…」

絶対に嘘だ。足に青アザが出来ている。

表面だけを分解してもダメそうだ。

「ゴメン、足を全部を分解するからちょっと驚くかも…動かないで

ね。」

すぐにクランの足がなくなる。

「つきや…」

「大丈夫、竜を信じてっ！」

祐樹がいい所でフォローしてくれた。

足を形成する。うん、元通りだ。

「ありがとう…でも魔力が…」

「大丈夫だつて。オレ魔力多いほうらしいからっ！」

「本当にありがとう。」

交互に2人から感謝される。

こういうときは祐樹は決まってすねるんだよなあ…

立場的に苦しくなる…

「竜、この辺の薔薇も無くなつたことだし、配属場所に戻らないと。

「うん。行くか…」

そのとき、嫌な悪寒がした。

「どうしたの？」

「来る…」

「どうしたの竜？私たちもう大丈夫よ。」

2人とも首をかしげている。

「違う、何がが、来る！」

ばつばつばつ…

囲まれた。

「おやおや…感のいい子ねえ…」

どうやら修行で身に付いたのは魔力を察知することみたいだ。
みんなは気づかなかつた…

「せつかく「イツらが行つたら女の子2人を料理してあげようつと思つたのに…」

「大丈夫よ。どうせみんな死ぬんだし。」

どうしようもできず、会話を聞くことしか出来なかつた。

「さて、ここで4人消して、私たちも昇格ね。」

何が起きてるんだ…

「めんどくさいから…抵抗しないでね。」

〔冗談じゃない…〕ニーオンが5体なんて…

絶体絶命（後書き）

最期まで読んでください、有難うございました。
竜たちは5体ものユニオンを倒せるのでしょうか?
次回をお楽しみに。

恐怖を通り過ぎると、笑いがこみ上げてくると嘆のは本当だ…
「竜、もう一度さつきのやるから氣を引いて。」

祐樹は勝つ氣でいる…

「あら…足に魔力を溜めてるわねえ…また瞬間にスピードをあげようとも考えていいのかしら?」

何…?

「不思議そうね。私たちには死んだ同志たちの記憶が流れ込んでくるのよ。」

「祐樹…さつきのは無理そうだな…」

祐樹が悔しそうに頷く。

「もちろん私たちは戦闘の経験値が倍増されるわ。あなたたちが私たちを殺せば殺すほど、私たちは強くなるのよ。」

「祐樹！ 右だ！」

さつき祐樹の足元から木の尖ったものが突き出た。

とつさに祐樹は避けることが出来たが、ギリギリだ…

「お喋りはあまり好きじゃないのよ。」

「やれやれ…じゃあ殺しましょつか。」

「くつ…」

一斉にかかってきた。

クランとヘレンは身動きできずにしてる。

「クラン！ ヘレン！ 一旦ギルドに戻れつ…」

鉄の柵を自分たちの周りに作る。

「い…いやよ…そんなの…あたしも戦うわつ…」

「私も…」

「僕たちに任せて…」

「上は、がら空きねつ…」

上から1体のユニオンが入ってきた。

「ぐ…」

今度は出口の無いドームを形成する。

「こんなもので防げるとでも思つ…？」

他の5体は柵を壊して向かってくる。

1体のユニオンがドームを破壊しようと棘を放つている。
必死に魔力を注ぎ込んで強度を上げる。

「早く戻るんだ！」

「いやよつ！仲間を見捨てるなんて…」

「そうよつ！」

ユニオンは攻撃を続いている。

「いいから戻れ！」

なんと声を張り上げたのは祐樹だった。

そして、優しい口調で言った。

「ここは僕たちがなんとかするから、戻つて。大丈夫、僕たちは死
なないから。」

「それならあなたたちも…」

「僕たちが戻つたら紅界が解けるからダメだ…」

そういうと、彼女たちの体が薄くなつていつた。

「何で…？何でよクラン…？あたしはまだ戦つわ！」

「ヘレン…」

クランは強い口調で言つた。

「ぐ…早く…」

もうドームも壊れそうだ…

「ほらほらあ！いつまでそりやつてやつてゐつもりよつ…」

依然として攻撃は止まない。

「ここは任せるので。私たちがいても足手まといだわ…

もう彼女たちの姿はほとんど見えない。

「ありがとう。信じてくれて…僕たちは絶対大丈夫だから…」

「絶対に…死なないでね…」

そういうつて彼女たちは消えた。

「そろそろ限界だ…」

「あと少し絶えて！」

祐樹は足に魔力を溜めているよつだ。

「「メン…もう…無理…」

ドームが壊れた。

同時に、祐樹が僕を抱えて飛ぶ。

「…助かっ…」

「助かつてないわ。」

ドカンッ！

「うわっ！」

後ろから吹き飛ばされる。

直撃ではなかつたが、痛い。

「敵は1人じやないわよ。」

うつ…。

「ぐあつ…」

祐樹が後ろからムチで打たれた。

「祐樹つ！」

「2人、逃がしちやつたわね…あなたたちは…逃げないの？」

祐樹がふふっと笑う。

「お前たちなんかが相手で、逃げるわけないじやん…」

ドカンッ！

今度はムチで周りの壊れたコンクリート類を投げつける…
オレは祐樹を抱えて下がつた。

「口だけは達者なようね。」

火に油をそそいだようだ…

「どんな状況か分かつているのかしら？」

オレたちの前には5体が横一列に並んでいる。

「分かつてるさ。オレたちが有利だつてことだろ。」

オレは魔力がまだ結構残っている。

祐樹は…それでもなさそうだ。

「その口、一度と呑けないよつこしてやるわ。
5体がオレたちの周りを囲む。

頼む……

「終わりね。やよつなら。」

「死んでたまるか！」

辺りが静まり返った。

すつと5体が消える……

何が起こつたか分からぬ……

「竜……何したの？」

「こんなに……」

「竜……？」

自分で驚いた……

「体全体から魔力を放出したんだ……そしたら……」

「一瞬で消えた……」

たじろいでいる場合ではない。

「一旦、帰るぞ……」

オレは心の中で「入る」と念じた。

消滅（後書き）

最後まで読んでください、有難うございました。

前回の最後という漢字、間違つてました。すいません。

これからも戦闘続きです。どうぞこれからもよろしくお願いします。

「ローズフィリア様、報告します。」

「どうやら機嫌の悪いところに来てしまったようだ。」

「何よつ。今忙しいから早くしてよね。」

「手に魔力を集中させている。」

「ユニオンが6体やられました。」

「怒りは最高潮に達した。」

「ふざけんじやないわよー！」

魔力が乱れる。

「内、5体は他の仲間への意思伝達無しに消滅しました。」

「つたく…ユニオンのレベルは？」

魔力をもう一度収束させる。

「どれも2以下です。」

「ならないわ。」

怒りがすうっと消えていく。

手を開くと、ポンッという音と共に黒い薔薇が咲いていた。

「兵隊は美しく散るためにあるものよ。」

悔しい…

「クラン、どうし…」

やはり帰つてきても悔やんでいるよつだ。

「ああやつてするしかなかつたわ…」

「でも…」

「竜たちを信じるのーそんなことより報告よー。」

「う、今できる、最善のことをしないと。」

「アリス！祐樹たちが！」

事情を説明する前にアリスは動いていた。

「分かつてる！これは異常事態よ！」

「異常……最悪な光景が頭をよぎる。

「今からBランク以上の術者の人で、手が空いてる人が、並行してクエストを受ける人たちに応援に向かってもらうわ！」

きつと…ベインたちの仕業ね…

加勢に行くまで、あの子達がもつかどうか。

「もうこれはクエストとではなく、世界を守るためよ！紅界は私が維持するから、みんなは思う存分暴れてきて頂戴！」

うおお！と、雄たけびを上げ、次々とみんな消えていく。

「久々にまともに力使えるよ。」

「エノは、ほとんど力使わねーからな。」

怪我をしている人もみんなお構いなしに消えていく。

「ヘアリー！祐樹が怪我してるんだ！治してくれ！」

「分かつた！今行くわ。」

……！？

「祐樹、竜！？」

駆け寄つてくるクランとヘレン。

「あなたたち、無事だつたの！？」

アリスも驚いている。

「当たり前だろ！…正直やばかったけど…」

自分の魔力がほとんど無いのが分かる。

「竜に助けられたんだ…」

祐樹の傷がどんどん治つていく。

「信じてよかつたわ…」

目に涙を浮かべて言つてくれた。

「あなたたち、ユニオン5体に囮まれたんでしょう！？」

「よく分からぬけど…相手が消えた…いや、今はそれどころじやない！あとで説明するよ！」

オレも祐樹もすぐに行動する。

「待ちなさい！」

アリスが怒鳴った。

「あなたたちは命の重みを分かつてない！今行つて死ぬつもり！？勇者にでもなるつもり！？せつかく助かつた命なんだからもつと大切にしなさい！」

：オレたちはアリスと田をあわせることができない。

クランたちも、ただ見守つている。

「あなたたちは休んで。どうやって助かつたかも知りたいしね。」

ふう…アリスが怒ると息苦しい…

ん？もやもやした感覚に浸る。

「私が話すわ。竜たちは部屋でゆっくり休んで。」

クランの田の色が変わつていいくところが見えた。

「ヘレン、あなたもよ。私もすぐに行くから。」

ヘレンは頷き、素直に従つ。相当疲れているのだろう。戦闘が開始してから、丸一日くらいはたつている。

「クラン、頼むよ。祐樹、体力回復してすぐに行くぞ。」

「うん。そうだね。」

魔力は、ほぼ空だ…少しでも多く回復せねば…

部屋へ戻ると、すぐにベッドに入つた。

こうじうときは決まって寝付けないんだが、今日はすぐに眠れた。目が覚めると、外は薄墨色になつていた。

「早く行かないと！」

祐樹を起こしに行つたら、ちよつと起きたところだった。

「魔力は回復した？」

「完全回復したぜ！」

ある程度は回復したが、完全ではない…

「僕、まだ半分くらいしか回復してないや…」

弱気になる祐樹。オレの言葉を真に受けたようだ。

「大丈夫だ！半分あれば戦える。」

祐樹の顔に笑顔が戻つてくる。

「うん！早く行こう！」

「行くぞ！」

「出る」と念じた。

「……とこうわけらしいわ。」

最後まで黙りこんで聞いていたアリス…

まつたくの無表情なので、聞いているのかさえ分からぬ。

「……どうして…」

やつとアリスが口を開いた。

「ゴニーオンは…すべて消滅したのね？」

真剣そのものの田には迫力がこもつている。

「え…ええ。そうよ。」

そのとき祐樹は消えなかつた。

しかし、敵は消滅した。ということは…私はとんでもない逸材を

背負い込んだわね…

「……きっと、もう一度使おうとするとな大変なことになるわ…」

「え？」

複雑な表情を浮かべる。

「今はまだいい…それよりも、あなたは早く休んで。」

一刻も早くとめないと…

「分かったわ。アリスもほどほどにね。」

多分無理よ…

クランは部屋へ走つていった。

「もう配属場所なんて無視だな……」

昨日の場所に戻ると、あちこちで戦闘が起っていた。
そして、敵の数も増えていた。

「昨日のやつもう一回やればっ？」

祐樹は楽しそうだ。

「あれは……怖い。」

祐樹の周りにクエスチョンマークが飛び交う。

「普通に戦うぞっ！」

敵を潰して回る。

「つたく…何匹いるんだよ…」

あきらかに敵の強さは強くなっているが、数が減つてない。
ユニオンはまったくない。

合体しようとしてしないのはおかしい。

「なんだか踊らされてるような気がしない？」
ちゅうじオレもやつ思つたところだ。

それやろよ。

もつすぐで薔薇の侵略が始まるわ。

「うふふ…」

薔薇の美しさを知らずに、破壊しつぶしていくやつに思ひこ
と想ひこ

美しいものには棘がある」とをねえ…
知らせてやるのよ。

「ローラーん」機嫌だねつ！」

珍しく自分の足で立つているキューブ。

「ローラーちゃんやめんかい。」

「だつて今日ベインいないんだもん。」

頬を膨らましても通用しないんだからね。

「会話が成り立つてないわ…。ベインどこ行ったの？」

「笑顔が変だよ。ベインは知らない。」

「愛想笑いなんか一度としてやんない。」

「それより薔薇きれいだねっ！」

「あんたにも薔薇の素晴らしさが分かるなんてねえ！」

「心からそう思った。」

「血の色みたいで……」

え？

「ローちゃん頑張ってねえっ！」

「笑顔の裏に何を隠してるの……」

怖い子供だ……

「なんだ…？」

「地響きがする。」

「うわあ！」

突如地割れが起こつた。

祐樹とオレが別々に分かれる。

地面が次々とひび割れしていく。

「こっちへ来い！」

まだ割れ目が広まつてなかつたため、飛び移ることが出来た。

「危なかつたあ…」

「なんか来るぞ！」

割れた地面から太いツルが何本も出てきた。

「走れ！」

言つ前に体は動いていた。

必死に逃げる。

すぐ後ろから雪崩のよに押しかけてくる…

追いつかれる。

「おい！新人！」

オレたちの体がふわりと宙に浮く。

「何やつてるんだよ。」

上を見上げるとエノがいた。

「あれ…何？」

「僕が知るもんか。」

風の力を使っているのか、3人とも上からツルの雪崩を見下す。

「はめられたんだな…」

自分の不覚を責める。

「ねえエノ、これってどれくらいもつ？」

祐樹が指を回転させながら聞く。

「ずつと。」

は？

「魔力は？」

「無限。」

！？

「ええ！？じゃあ絶対負けないじゃん！？」

エノが呆れて首を左右に振る。

「冗談が通じないの？それに魔力があつても負けることはあるんだよ。」

こんな自分よりも小さい子に馬鹿にされるとは…
おつ。

「動きが止まつたね。」

ツルはビルくらいの高さまで積もつていた。
周りを見渡すと、みんな空中に浮いている。

中にはツルに飲み込まれて、助けてくれと叫んでいる人もいるが…

「これ…どうすんの？」

「どうしようもない。」

「どうしようもない。」

エノは腕を組んで考え込んでいる。
考えがまとまるまでこのままだな…
紅黒い空は開幕を告げているよつだつた。

作戦開始（後書き）

最後まで読んでくださって有難うございました。
なんだか書いていていろいろとネタがつきやつた気がします。
これからもよろしくお願いします。

このイバラのようなツルは危なくないのか？

急に動き出したりしないだろ？

「下……降りてみる？」

「いや、危な……おいつ！」

エノはオレたちの体を下ろそうとする。

「下降りないと何にも出来ないだろ？」

「でも……つぎやつ！」

落とすつもりか……このクソガキめ……

「大丈夫、落としたりしないよ。その代わり、おとなしい祐樹を見習いたまえ。」

くつそお～……

「見習いたまえ！」

く……怒り増加……

「祐樹い！お前なあ……」

「来る！」

エノに会話をさえぎられる。3連続でオレの言葉を……

「御機嫌よう。みなさん。」

また……ベインか……前よりも魔力が小さい。

「さ、よ、う、な、ら！」

エノはベインを無視し、高密度のエネルギーを放った。ベインの体を通り抜ける。

「何！？」

「おやおや、殺氣立つてますねえ……」

見下した言い方は変わらない。

「しかし出てきたとたんに攻撃するのは無礼ではな……」

「それっ！」

祐樹も攻撃を仕掛ける。

「そんなに殺されたいか？」

背筋が凍るような目つきだ…

「…………私はビジョンだ。全国にいる術者の皆に話しかけていい。私の仲間が、第一段階の作戦を成功させてくれたから出向いた、とこいつとこひだだ。」

「どういうことだ？」

エノは顔色を変えずに、ベインを見つめつづけている。

「第一段階の作戦を実行しに来た、と言つておこいつ。」

エノは理解しているのだろうか。無論オレたちは理解不能だ。

「竜はどういう意味か分かる？」

「わからんね……」

あのビジョンからは何も魔力は感じない。

「でははじめようか。生きてまた会える」と祈つてこるよ。」

心にも無いことを……

ベインが両手を合わせて組む。

「ナイトメア悪夢の始まり……発動。」

世界が歪み始める。世界が崩れた……

崩れる瞬間に目に入つたベインは、陽気に手を振つていた。

世界が変わつた……ここはどこだ？

長方形の部屋一面に、白と黒のチェックの模様が付いている。

「気持ち悪い……」

「そりゃかい？いい部屋だと思うんだがな。」

驚いた……白と黒の床から、まるで下から何かで押されたかのよつて人が出てきた。

「誰だ？」

「俺は…………お前だよ……」

こちらへ手のひらを見せる。

な……に？

オレの腕が……消えた……

いや、この感覚は原子になつた……？

「ぐ……」

必死に腕をかき集め、元に戻す。

「お前は……誰だ！？」

「だから俺はお前だつて。」

「ベイン！お帰りつー！」

「ああ、ただいま。」

ふううと、椅子に深く腰掛ける。

「どうしたの？元気ないよ？」

「いや、さすがに千幾つもの部屋を作るのは疲れるよ……」

ははっと笑つて見せる。

「少し休ませてくれよ。」

「はあーい！」

ベインの上から飛び降りると、滅茶苦茶な向きに作られたドアを開けて入つていく。

ホントに無邪気な子供だ。

そして素直でいい子。

私は疲れてなどいないよ。

ただ……あの程度の術では100人程度しか死なないとは思つが……もしかしたらもつと死ぬかもしれない。

なんせ自分の弱さと戦うのは、心身ともに追いやられるからな。

その弱さに打ち勝つ方法は2つしかない……そんなあいつらが哀れすぎて、内面的に疲れた……

まあ何人かには特別なやつと戦わせているんだがな。

「何人残るか……見届けさせてもらひつぞ。」

くつそ…

敵は原子を巧みに操り、攻撃を続ける。

「オレは、お前が誰だって聞いてるんだ！」

攻撃が当たる……止まつた？

「だから何度も言わせるなよ。俺はお前だ。」

はあゝとため息をついて、首を左右に振る。

「オレはお前みたいなチェックな模様じやないぞ…」

「見掛けで人を判断しちゃだめだつて。俺はお前の弱さの塊。」

弱さの塊～？

そんなふざけた話が通用するものか。

「この部屋、なんて言うか知つてる？」

「ナイトメアだろ？」

オレは何でこんなやつと話しているのだ？…

「そう、悪夢だ。もつとも自分の嫌なものと戦うんだよお…」

急に不意打ちを仕掛けてくる。形成までの時間の短縮を修行でやつたため、なんとか防げた。

「お前が一番嫌いなもの……それは自分の弱さだろ？」

なぜ…なぜ知つてる？

「そあらよつ！」

「うぐつ……」

後ろから陶器で殴られた感覚がする…

背中に直撃だ…

なんで…お前はオレの手の前に居ただろ？…

「ほりな。まだ力を完璧に自分のものにしていない。お前は弱い。」

くう……倒れたまま歯を食いしばる。

「いつもいつも祐樹に助けられている。そんなんだからザ「なんだよ。」

お前……ぜつてえ許さねえ…

消してやる……体全体に力を溜める。

「使うのか？お前は一度使つて分かつてているだらう。大切な何かが無くなつてもいいのか？」

あ……

体から力がすうっと引いていくのが分かる。

俺がにやりとする。

「その程度の覚悟で使おうとしたんじゃねえよ。」

「ぐはつ……」

腹を蹴られる。

口から血が飛び散る。

「死ねよ。俺がお前になつてやるからよ。お。肩を鉄のガントレッジをはめた手で殴られる。もう左肩は使えない……

あんな使い方が出来るんだな……

「よわつちいねえ……こんなんで生き残れたのは奇跡だ。」

「ぐ……がはつ……」

襟をつかまれて上に持ち上げられる。

「オレが、生き残れたのが、奇跡だとしても……これから強く、なりや……いいだろ。」

「お前に出来るのか？」

黒い目がオレを凝視する。

「あ……なれなくとも、なつてやる……」

にらみ返す……

「なれなかつたら殺すぞ。」

「喜んで殺されるさ……」

フンと言つてオレを放した。

いつてえ……落とすなよ……

「俺だつてお前が消えれば消える。初めから殺すつもりなんかねえよ。」

オレは、すぐさま傷を癒す。

「俺を説き伏せたお前に、いいことを教えてやる。」

俺の体が消えていく。

「こ」の部屋に入ったものが出る方法は2つだ。敵を説き伏せるか、力ずくで跪かせる。」

「オレにはもう、関係ないだろ。」

邪心がにやりとする。

「果たしてホントにそつかな……？」

なんで？

「あばよ。」

「ちょっと待て……」

消えてしまつた。と同時に「」の世界が崩れる……
気が付くと、外にいた。

「竜！？」

祐樹じやないか。

「よかつた！なんかみんな消えちやつたんだけど……」

「何！？」

じやあ何でお前は平氣なんだ……

「どうしてみんななくなつちやつたんだらつ……」

「まさか！？」

……みんな戦つているのか……？

「こ」だよ。

「氣味悪いなあ。」

辺り一面に黒い薔薇が咲いている。

「氣味が悪い？」

エノの後ろには変化した薔薇がいた。

「ああ、お前のようにな。」

「そんなこと一度と言えなくなるわよ。」

周りの薔薇が一斉に変化し始めた。

「雑魚がどんなに集まつても雑魚なんだよ。」

「残念だけどその言葉、あとで撤回しなきゃならなくなるわよ。」

薔薇が一体に絡みつき始めた。

クネクネとした動きが気持ち悪い。

やがて、一つの人型が出来た…魔力はさっきまでのとは桁違いだ。

「これを見てもまだ雑魚って言える?」

「確かに魔力は普通のユニオンより高いね。」

「私はレベル3だからねえ。融合したやつらの強さと、経験値によつて変わるけど。」

僕にとつては、大して変わりないといつのこと。

「ねえ、ここつて君と僕しかいないの?..」

「直に私だけになるけどねえ。」

エノがくすくすと笑つた。

「君、ラッキーだねえ。誰にも見られてないなら、僕の術見せてあげるよ。」

「そう、使う前に死ぬんじゃない?」

エノは無視した。

ユニオンはムツとする。

「それは、異の術かしら?」

「違うね。水と風を同時に使うんだ。」

右手に風、左手に水の属性を、魔力をコントロールして放出をせている。

空気がピリピリする。

「そんなことできるわけないでしょ。」

「不可能を可能にしたから氷の術が使えるようになつたんだよ。」

ふふつと笑つて両手を合わせる。

「死ねよ。アイスモーメント」

「死ねよ。一瞬の寒」

両手をほどき、魔力を地面に手をつけて放つ。

地面が凍つっていく。

「な…何よこれ！？」

ユニークの足は氷となり、動けなくなつっていた。

「大丈夫だ。寒いのは一瞬だけだからな。」

「やめなさいよっ！」

股、腹、胸、首と、順に凍つっていく。

「前言撤回はならなかつたよ。所詮雑魚は雑魚だ。」

「きやあああああ！」

頭まで氷となつたユニークは、一度と叫ぶことはない。

エノの手には氷の刀が握られていた。氷刀とでも言つのか？

その柄の部分で凍つたユニークを殴りつける。

「さようなら。」

氷塊は粉々に砕け去つた。

読んでいただきいて、有難いございました。

「ふつとエノが現れた。

「エノ！？大丈夫だつたか！？」

「僕があんなのに負けるわけがないじゃないか。」

状況が読めない祐樹。

「2人とも何があつたの？」

話してやると、不思議そうな表情を浮かべた。

「なんで僕だけ？」

「だから今考てるの。」

エノが反応した。

「いろんなところで魔力が戻つてきている。みんな傷は負つていて
が、死んでいない。」

よかつたと、胸をなでおろす。

「エノつて魔力の察知がうまいんだね。」

「まあな。」

軽くかわした。

「ふふふ……君たち、ちゃんと生きているじゃないか。」

またベインが現れる。

「さつきのは、何が目的だ！？」

「おや？みんな帰つてきましたか……100人ほど死んでくださると
思つたのですが……」

く……質問無視か……

「まあいいでしょう。私の役目は終わりました。では……」

消えた……

何しに来たんだベインは……

「遠いところに大きな魔力が9つ……」

「ここにも1つ」

「なー？」

後ろには知らないやつがいた。
でも……敵つてことは分かる。

「オレはクリア。お前たちを消すものだ。」

「クリア……だと……？」

エノの表情が一変した。

「どうしたの？」

「クリア……別名、キャントシー……見ることができないやつだ。」

「よく知ってるじゃないか
あれ？」

消えた……

「正確には、見ることができないだけじゃなく、魔力を消したりすることも出来るんだがな。」

「うわあっ」

祐樹が吹っ飛ぶ。

「おい、お前ら下がつてろっ！」

「そうだ。オレはお前にしか用ねえからな。」

エノに向かつて攻撃を仕掛ける。

敵が見えないので困る……

「祐樹、大丈夫か？」

傷を治療する。

「うん……」

頭を殴られたのか、意識が朦朧としている。

「そういうやつ、何で僕たち普通に空中にいられるの？」

「知らないよ。」

多少意識がしつかりしてきたようだ。

多分、空中にいられるのはエノのおかげだろ？
戦闘をしながらこちらにでも気を配つていい……

「祐樹、下に下りるぞ。」

今できる最善の余地はこれしかない。

「エノ、頑張ってくれ……」

「あいつら、なかなか利口じゃないか。」

「ああ、そうだな。」

「……敵が見えないのが、こんなにも辛いとは仕方ない。」

右手に風、左手に水を…

「食らえ、一瞬の寒。^{アイスモーメント}」

前とは違い、天候が変化する…

吹雪になってきた。

「おい、お前知ってるか。」

「何がだ？」

見えない相手に向かつて話しかける。

「さつきの部屋だ。あれは単に、お前らの仲間を消そうとしてしたものではない。」

「だったら何だつて言つんだ？」

笑い声が聞こえる…

「消そうとして作った部屋もあるだろうな。しかし、別の意味もあつた。」

なぜコイツは冷氣の中、こんなに落ち着いていられるのか…

「それは、相手の術を見るためでもあつたんだ。」

「そうかそうか。でもここまで荒れた天候を、どうにかできるものか？」

吹雪はうなり声を上げ、吹き荒れる。

「もう一つ問おう。オレのナンバーを知つていいか？」

「8だろ。その程度で僕をたおそぐなんて無理だよ。」

「ナンバーなんて飾りなんだよ。ただオレは8が好きなだけだ…」

よし、思つたとおり。

話しているうちに冷氣で相手の姿が見えてきた。

光で屈折させて、見えなくしていただけだったのだ。クリアは気づいていない…

「オレの力、教えてやるつ

「その前に死ぬよ！」

ねじれた氷柱が、相手に突き刺さる。

「氷柱アンシルガイの集合点！」

敵は消え去った。

「所詮はNO.8だ。」

「人の話は最後まで聞こつぜ。」

何！？

「ぐあ……」

腹に無数の穴があく…

「オレは煙にもなれるんだ。どちらにせよ、見えないがな。」

「くう…さつきはわざと見えるようにしたのか…」

「じゃあな。」

手に火を集め、拳を作つて殴りかつてきた。

死んだな…

「何！？」

瞑つていた目を開けた…

「悪い、遅くなつて。風操るの難しかつたんだ。祐樹は風使えないから下にいるよ。」

そこには竜がいた。

「…お前…死ぬぞ？」

「かまわない。決めたんだ、約束したんだ。あいつと…」

「どんなことがあっても、守つてみせると…」

もしあの力を使って、大変なことが起きても、なんとかなるぞ。出来る限り使いたくなかったんだけどなあ…

「消えろつ！クリア！」

体中から一気に魔力を放つ。

「ぐ…なんだ…お前…は…」

クリアが本当に消えた…

「お前…その力は…」

「ぐうああああああああ！」

何かが起こると想っていたが、やはり……

「くう……ぐぐぐ……ぐつあああ……」

「何だ……？」

眩い光に包まれ、エノが吹き飛ばされる。

「おおおおおおお！」

「竜！――！」

祐樹の声は、もはや届かない。

「竜！――！」

「ぐわっ！――？」

と止まつた。

いや、違つ……これはただの……儀式……

「上だ！」

エノが叫ぶ……

上こは……竜！――？」

「なんだ……」のトカイのは……

「緊急事態だ……」

そういう割りに、非常に喜んでいる。

「まさか、自分で呼び出してくれるとこ……」

「ねえねえ！ベインつーあれ何ー？」

「あれは神龍だよ……」

まったくキューブのまつを見よつとせば、ただ言葉を並べる。

「計画変更だ。」

「クリアが死んだよ？」

ベインは一瞬たじろいだが、すぐに元に戻る…

「その程度の男だったと言うことだ。」

「ローズフィリア、スバル、キューブ、ロザリオ、レイジ、フニー
ツクス、ウロ、ローネフ。みんな、ついてきてくれるか？」
みな頷く。

「では行くとしよう。我が進化を持つて、新世界へ。」

ぱつ

目覚めが悪い…

嫌な予感がする。

即行で着替え、アリスの下へ行く。

「アリス、ヘレンは？」

「先に行つたわ……それより、まことになつてゐる…」

「私も行くわ！」

「待ちなさい！」

この頃のアリスは怖い…

「今行くと危険だわ。おさまつてからにして…お願い。」

深刻な表情だ…

それほどまでにまことにが起きているの？

「何が起きてるの？」

「ベインが近頃、頻繁に動き出したのは、これを狙つてたのね…」

聞いているのか？

「私が止めないと、私が…絶対に。」

いや、聞いてないだろ？

外では何が起こってるの？

空は、死んでいた。

最後まで読んでください、有難うございました。
これから、入試なので更新が遅れるかもしれません。
すいません。
これからもどうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5511d/>

地球上の異世界

2010年10月11日03時04分発行